



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2016 : 年次記録 : 持続可能な開発目標 (SDGs) に貢献する高等教育のあり方
Issue Date	2017-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65308
Type	report
File Information	chapter-3.pdf,



3. サステナビリティ・ウィーク 10 周年記念 国際シンポジウムのウェブサイト

サステナビリティ・ウィーク10周年記念 国際シンポジウム

～持続可能な開発目標（SDGS）に
貢献する高等教育のあり方～

実施記録



北海道大学
サステナビリティ・ウィーク2016
Hokkaido University Sustainability Week 2016

「だれか」ではなく、「私たち」が
「いつか」ではなく、「今」から
世界の課題解決に貢献するために

北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局
2017年3月



北海道大学
サステナビリティ・ウィーク 2016
Hokkaido University Sustainability Week 2016

「だれか」ではなく、「私たち」が
「いつか」ではなく、「今」から
世界の課題解決に貢献するために

Hokkaido University
サステナビリティ・ウィーク 10 周年記念

国際シンポジウム

～持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方～

2016 年 10 月 29 日  30 日 

開会あいさつ



北海道大学サステナビリティ・ウィークの10周年を記念する国際シンポジウムの開催にあたり、ご協力ならびに参加いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

持続可能な社会は、多様な価値観に基づく物事への多角的なアプローチによってこそ実現すると私は信じています。実際、サステナビリティ・ウィークには毎年、「持続可能な社会の実現」という共通の目的を掲げる多彩な企画が自然と集い、そのバラエティさが最大の特徴であり魅力となっています。

今回の10周年記念シンポジウムも、サステナビリティ・ウィークの縮小版になっており、「SDGsに貢献する高等教育のあり方」という共通テーマの下で、学内外の様々な組織が多彩な分科会を提供してくれます。

さて今年1月、国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」が発効されました。世界が「持続可能な開発のための2030アジェンダ」という新しい認識に基づいて、2023年までに17個の目標を達成しようと挑戦を開始したのです。サステナビリティ・ウィークの節目のタイミングと一致したわけですが、私には予期せぬ「必然」であるように思えます。

北海道大学もまた、新たな挑戦を開始しようと、サステナビリティ・ウィーク10周年を目前にした平成28年4月、北海道大学の総長は、「サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム」を設置しました。そして、持続可能な社会の実現に貢献する教育と研究に力を入れてきた北海道大学が、その歩みをいっそう強固にするためには、教育において新たにどのような行動を取るべきか将来構想を考えるよう、指示したのです。

本シンポジウムの1日目の最後に、同プロジェクトチームから将来構想の素案が提示され、参加者全員で議論します。その議論が多角的に行われるよう、議論に先立つ2つの基調講演を通じて、世界の先進的な取り組みを学びます。

全体会の前後には、「北極域」、「図書館」、「持続可能な発展のための教育」や「学生目線」、「文化遺産」、「和解」といった特定のテーマごとに分科会を開催して議論や体験を深めます。最後の全体会では、教育と学修の現場のニーズに耳を傾けつつ、SDGs時代に相応しい大学のあり方について、まとめの議論を行います。

参加者の皆様には、北海道大学が10年間の歩みを振り返り将来を展望する機会を活用いただき、SDGsを掲げる新たな時代に必要な、新たな価値観に基づく新たな行動とはどのようなものかを発見するきっかけとなれば光栄です。

本シンポジウムの参加者が、何かしらの実りを携えてそれぞれの現場へ戻ることができるよう祈っております。

北海道大学 理事・副学長
国際連携機構長
サステナビリティ・ウィーク2016実行委員長
上田一郎

趣旨説明

**サステナビリティ・ウィーク10周年記念国際シンポジウム
～SDGsへ貢献する高等教育のあり方～**

2015年9月の「国連持続可能な開発サミット」において「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。このアジェンダは、17の目標で構成される「持続可能な開発目標（SDGs）」を掲げ、地球規模で2030年までの達成を目指す。

このような新たな時代にあって、教育、学修、研究、開発の中核を成す高等教育界や各大学には、積極的な貢献が求められている。それには、新たな価値観に基づく新たな行動が不可欠であると、多くの人が賛同するであろう。

では、新たな価値観とはどのようなものであろうか。たとえそれが理論化されていないとしても、その存在や発生を暗示する現象や活動にはどのようなものがあるだろうか。あわせて、新たな行動を生み出すにはどのような環境を整えればよいだろうか。大学を形成する教職員や研究者、学生そして地域の市民は、何があれば（もしくは無ければ）新たな行動をひらめき、動機付けられ、一歩を踏み出し、継続することができるのであろうか。

教育や学修の現場のニーズに耳を傾けつつ、SDGs時代に相応しい大学のあり方について、参加者とともに議論する。

各全体会・分科会のタイムスケジュール

10月29日(土)

10:30 ~ 13:45 分科会 1

10:30~12:30 総合博物館ツアー（1回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！ー北極域展示室を通してー」
北極域研究センター

11:00~12:30 市民セミナー&図書館ツアー

「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」
附属図書館

11:30~13:30 総合博物館ツアー（2回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！ー北極域展示室を通してー」
北極域研究センター

12:30~14:00 HESDフォーラム総会（クローズド会議）

14:00 ~ 17:30 全体会 1

14:00~14:10 開催あいさつ

- ・北海道大学理事・副学長 上田一郎
- ・文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐 鈴木規子

14:10~14:30 開催趣旨 ～サステナビリティ・ウィーク10年の歩み～

北海道大学理事・副学長 上田一郎

14:30~15:15 招待講演1 「SDGs 達成のための高等教育の役割」

AASHE（米国の高等教育における「持続可能な発展」に向けた活動を促進する非営利団体）理事 キンバリー・D・スミス

15:15~16:00 招待講演2

「リスク社会における不確実性を生きるための知識とは～チェルノブイリ後のドイツにおける市民の“方向性の知”に基づいて～」

フェリス女学院大学 准教授 高雄綾子

16:00～16:20 休憩

16:20～17:30 特別講演 「北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像」

- ・ 座長：北海道大学 大学院教育学研究院長 小内透
- ・ 発表者：北海道大学副学長 山下正兼
- ・ 指定討論者：ソウル大学校 師範大学長 Chan-Jong Kim
- ・ 指定討論者：東京大学 大学院教育学研究科 准教授 北村友人
- ・ 指定討論者：駐日スウェーデン大使館 科学・イノベーション部
Mats Engström
- ・ 指定討論者：駐日ノルウェー王国大使館 通商技術部・シニアアドバイザー 松本宏

17:30～18:30 交流会

10月30日（日）

9:00 開場・受付開始

9:30 ～ 12:30 分科会 2

9:30～12:00 講演 1 「HESDフォーラム：事例報告」

HESDフォーラム

9:55～12:00 講演 2 「北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方」

北海道大学ヘルシンキオフィス

- ・ 講演者 1：駐日ノルウェー王国大使館 通商技術部・シニアアドバイザー 松本宏
- ・ 講演者 2：駐日スウェーデン大使館 科学・イノベーション部
Mats Engström
- ・ 講演者 3：駐日エストニア共和国大使館 Counsellor Argo Kangro

10:30～12:30 総合博物館ツアー（3回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！ー北極域展示室を通してー」
北極域研究センター

12:15 ～ 14:30 分科会 3

12:15～13:45 学生ワークショップ1 「大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる」

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

12:30～14:30 総合博物館ツアー（4回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！ー北極域展示室を通してー」
北極域研究センター

12:15～13:45 対談「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」

HESDフォーラム

- ・講演者1：立教大学社会学部教授・ESD研究所長 阿部治
- ・講演者2：金沢大学国際基幹教育院教授 環境保全センター長
鈴木 克徳
- ・司会：徳島大学大学院理工学研究部 三好徳和

14:00 ～ 16:00 分科会 4

14:00～16:00 学生ワークショップ2

「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」
環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

14:00～16:00 総合博物館ツアー（5回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！ー北極域展示室を通してー」
北極域研究センター

14:00～16:00 講演1

「コンフリクトを超える知を生み出す学びー分断社会における和解の可能性を探るー」 教育学研究院

- ・講演者1：フェリス女学院大学 高雄綾子
- ・講演者2：南山大学 佐々木陽子
- ・講演者3：NPOこえとことばとこころの部屋 上田假奈代
- ・指定討論者：北海道大学教育学研究院 准教授 石岡丈昇

- ・司会：北海道大学教育学研究院 教授 宮崎隆志

14:00～16:00 講演 2

「文化遺産とSDGs－失われた好機？－」 応用倫理研究教育センター

- ・講演者：UNESCO「文化財と平和」寄付講座
教授 ピーター・ストーン

16:15 ～ 17:00 全体会 2

16:15～17:00 総括ディスカッション「SDGsに貢献する高等教育のあり方」

- ・座長：北海道大学副学長 山下正兼
- ・各分科会からの報告

分科会1：市民セミナー&図書館ツアー

「市民セミナー&図書館ツアー『聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館』」

開催報告

報告者：北海道大学附属図書館利用支援課 調査支援担当 長嶋 岳生

前半は講師の国連広報センターの千葉潔氏から、国連広報センターの概要、国連の現状、国連の広報活動の実際、国連寄託図書館の趣旨などの講話がありました。国連は現在、著名人の起用等による親しみやすい動画を用いた広報活動に力を入れており、これらの動画の紹介も複数あり、国連の取り組みについて映像と音楽で楽しめる内容でした。

後半は附属図書館スタッフによる千葉氏のお話を踏まえての図書館ツアーでした。国連などの国際機関の資料を集めた国際資料コーナーや、札幌農学校2期生であり国際連盟事務次長としても活躍した新渡戸稲造にゆかりの資料展示、地下の自動化書庫等の見学を行いました。新渡戸稲造の資料展示では、図書館の資料だけではなく、大学文書館の協力により、新渡戸稲造が国際連盟の便箋を使った書簡のレプリカも展示しました。

参加者は本学の学生1名と一般市民37名でした。市民の中には高校生や親子連れの方も多く含まれていました。イベント終了後に実施したアンケートでは、「国連のことをたくさん聞ける機会はなかなかないので、とても良い講演で、自分にとってとても興味がわく内容でした。」といった声が寄せられました。図書館ツアーの後、高校生をはじめとする参加者との間で活発な質疑応答が交わされました。

附属図書館（国連寄託図書館）では、今後も国連の資料の収集・提供に加えて、国連のアウトリーチ活動に寄与するような講演会やセミナーなどを実施する予定です。



千葉氏によるセミナーの様子



図書館ツアーの様子

セッションの目的および概要

北海道大学附属図書館は国連寄託図書館に指定されています。国連についてのレクチャーと図書館（本館）のツアーによって、国連の現状と国連寄託図書館の趣旨を知る市民向けセミナーです。まずは、国連広報センターの千葉潔氏から、国連とその活動、そして、国連を知るうえで役に立つ資料などについてお話いただきます。続いて、附属図書館のスタッフの案内で千葉氏のお話に関連した箇所を中心とした図書館ツアーを行います。国連の活動全般を知り、北大図書館でより深く学ぶきっかけとなる企画です。

セッションのタイムスケジュール

- 11:00 ～ 12:10 国連についてのレクチャー
(講師：国連広報センター 千葉 潔)
- 12:10 ～ 12:30 図書館ツアー
(担当：附属図書館スタッフ)

セミナー講演者



千葉 潔
国連広報センター 知識管理担当官

要旨

- ・ 国連と、国連の活動について
- ・ 国連を知るうえで、役に立つ資料
- ・ 国連寄託図書館の意義

略歴

現在、国連広報センターの知識管理担当官。公式文書邦訳、ウェブ運営など。1989年勤務開始。広報/メディア、ライブラリー担当を経て、現在に至る。国連学会会員。

主催

北海道大学附属図書館（国連寄託図書館）

共催

国連広報センター

後援

独立行政法人国際協力機構北海道国際センター（JICA北海道）、公益財団法人札幌国際プラザ、札幌市総務局国際部交流課、北海道総合政策部知事室国際課、日本国際連合協会北海道本部

総合博物館ツアー

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！ー北極域展示室を通してー」

開催報告

報告者：北海道大学大学研究力強化推進本部URA ステーション URA 小俣 友輝

2016年7月にリニューアルオープンした北大総合博物館に、北極域研究センター展示「いま最も『クール』な研究」が新設されました。そこには北極域の人々の暮らし、陸や海・大気、グリーンランドの氷河に関する北大の研究、および中谷宇吉郎教授の研究について、解説パネルと展示物が設置されています。

総合博物館ツアー「持続可能な開発を『クール』に考えよう！ー北極域展示室を通してー」は、地球環境変動の影響を顕著に受ける北極域の課題や研究成果を通じて「北極域や持続可能な開発目標と自分との関わり」や「持続可能な開発目標に対する高等教育機関の役割」について来場者とともに考えることを目的として実施しました。

本企画の対象者は本シンポジウム参加者や、サステナビリティ・ウィークのウェブサイトを通じて企画を知る国内外の幅広い層および博物館を訪問中の北極域に興味のある参加者でした。北極域を研究分野とする本学大学院生が、北極域の概要、それぞれの研究活動、持続可能な開発目標についてツアーの中で解説し、参加者へアンケートを実施しました。

アンケート回答者は海外の方5名を含む学生、市民、企業関係者、教育関係者／研究者等の32名でした。北極域に関しては97%以上が、持続可能な開発目標に関しては85%が「少し以上は関係ある」と回答しました。ときに質疑応答を交えつつ、北極域や地球規模で生じている様々な課題を、より自分たちに関係のある出来事と感じていただけたようです。

ガイドを務めた学生は、性別、年齢、国籍の異なる多様な参加者に対して、フィールドで使用する器具を実際に手に取って見せるなど工夫を凝らし、一般的にあまり馴染みのない課題の共有に熱心に取り組みました。

参加者からは「博物館の展示において、インタラクティブなガイドツアーは新鮮」などの声が聞かれました。本学の多様なアクティビティをより広く深く共有するための手段として、博物館展示を利用した専門家によるツアーは非常に効果的との印象を持ちました。

今後国際連携機構、総合博物館とも継続的に連携し、互いに関係を発展させていきたいと思えます。



展示について説明する北大生とツアー参加者の様子



熱心に説明を聴くツアー参加者の様子

セッションの目的および概要

この夏、北大総合博物館に新しく北極域研究センターの展示が設置されました。ここでは北大北極域研究者の様々な研究アクティビティを紹介されています。地球で最も変動の大きい環境、生態系、人々の暮らしや文化を知り「持続可能な開発」とは何か、私たちとどういう関係あるのか、そして何ができるかを一緒に考えてみましょう！

展示室では、人々の暮らし（北方の技術、政治・経済）、生態系（陸上・海棲動物、鳥類）、陸の環境（シベリアとアラスカの環境と人との関係）、海と大気（海氷と生態系の変化、モデリング、衛星観測）、雪と氷（グリーンランドの氷河、北大の北極研究）、中谷宇吉郎教授の研究を紹介しています。

ホッキョクグマの剥製（本物）もあります！

セッションのタイムスケジュール

ツアー 1 回目	10/29（土） 10:30～12:30
ツアー 2 回目	10/29（土） 11:30～13:30
ツアー 3 回目	10/30（日） 10:30～12:30
ツアー 4 回目	10/30（日） 12:30～14:30
ツアー 5 回目	10/30（日） 14:00～16:00

集合場所と集合時間

北海道大学 学術交流会館の入り口にツアー看板が立っていますので、ツアー開始の10分前にお集まりください。解散場所は、集合場所と同じです。総合博物館に集合ではありませんので、お気をつけください。

主催

北海道大学北極域研究センター

開催報告

報告者：北海道大学国際連携機構 副機構長 川野辺 創（全体会司会）

基調講演によって、持続可能性を追求する国連のイニシアチブが概説された。同時に、アメリカとドイツにおいて高等教育機関や研究者が関与して行われた社会教育や市民教育の事例、その課題、そして地域社会との協働による教育の発展可能性について、国連のイニシアチブと関連づけて論じられた。特別講演では、北海道大学総長へ提言される予定のサステナビリティ教育の推進方策案について、国連「持続可能な開発目標（SDGs）」とどのように関連させるのかといった具体的な方策も含めて示された。その後、指定討論者によって当概 方策の特徴や課題、改善案が論じられた。



基調講演の質疑応答の様子



開催趣旨を述べる上田一郎 理事・副学長

セッションのタイムスケジュール

14:00～14:10 開催あいさつ

北海道大学理事・副学長 上田一郎

文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐 鈴木規子

14:10～14:30 開催趣旨

～サステナビリティ・ウィーク10年の歩み～

北海道大学理事・副学長 上田一郎

14:30 ～ 15:15 招待講演1

「SDGs達成のための高等教育の役割」

AASHE（米国の高等教育における「持続可能な発展」に向けた活動を促進する非営利団体）理事 キンバリー・D・スミス

15:15 ～ 16:00 招待講演2

「リスク社会における不確実性を生きるための知識とは～チェルノブイリ後のドイツにおける市民の”方向性の知”に基づいて～」

フェリス女学院大学 准教授 高雄綾子

16:00 ～ 16:20 休憩

16:20 ～ 17:30 特別講演

北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像

北海道大学副学長 山下正兼

全体会1：開催趣旨 サステナビリティ・ウィーク10年の歩み

開催趣旨：サステナビリティ・ウィーク10年の歩み



上田一郎

北海道大学理事・副学長

国際連携機構長

サステナビリティ・ウィーク2016実行委員長



HOKKAIDO UNIVERSITY

Contributions to SD to Date & Future

-- Focusing on Education--

Ichiro Uyeda
 Executive & vice-president
 Executive Director, Institute for Int'l Collaboration
 Chair, Executive Committee of Sustainable Weeks
 Hokkaido Univ.

Nov 29, 2016

1

Outline

1. Purpose of the Symposium
2. Footprint of HU's Contribution
3. Harvested Fruits
4. Future Perspective



HOKKAIDO UNIVERSITY

1. Purpose of the Symposium

(1) UN's Campaigns



2000 2005 2015 2016 2030

2000-2015 Millennium Development Goals

2005-2014 UN Decade of ESD

2016-2030 SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD



HOKKAIDO UNIVERSITY

1. Purpose of the Symposium

(2) SDGs & Universities

HEIs are expected to take on new actions grounded in a new set of values in the new era of SDGs.

- ✓ *What should be this "new set of values"?*
- ✓ *What type of environment should be prepared in order to foster new actions for education and learning?*



HOKKAIDO UNIVERSITY

1. Footprint of HU's Contribution

- 1-1. Univ. Policy
- 1-2. Organizations
- 1-3. Major Activities
- 1-4. Collaborative Education Programs

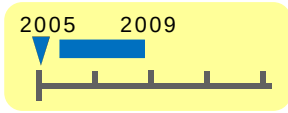


HOKKAIDO UNIVERSITY

5

1-1. Policy

(1) Hokkaido Univ. Initiative on SD



2005 2009

An 5-year initiative to encourage the Hokkaido Univ.'s community to engage in international education & research for realizing a sustainable society





HOKKAIDO UNIVERSITY

6

1-1. Policy
(2) Sapporo Sustainability Declaration (SSD)

2008 Present

G8 Univ. Summit

- The world's 1st Univ. Summit was held in Sapporo.
- 34 leading universities in the world signed the SSD.



"Universities will serve as driving forces behind the development of a sustainable society"

HOKKAIDO UNIVERSITY

7

1-1. Policy
(3) Global Action Programme on ESD

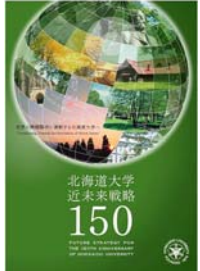
On UNESCO's website



HOKKAIDO UNIVERSITY

8

1-1. Policy
(4) Future Strategy for the 150th Anniversary



2014 2026

12-year Univ. Reform Strategy

"To Become the Univ. that Contributes to the Resolution of Global Issues"

HOKKAIDO UNIVERSITY

9

1-1. Policy
(5) Strategy for Sustainability Education

President's Project for SD in Hokkaido Univ. Education

- ✓ To Scale-up 推進方策
- ✓ To Build networks ネットワーク構築
- ✓ To Enhance visibility 広報

HOKKAIDO UNIVERSITY

1. Footprint of HU's Contribution

1-1. Univ. Policy

1-2. Organizations

1-3. Major Activities

1-4. Collaborative Education Programs

HOKKAIDO UNIVERSITY

11

1-2. Organization
(2) Office of Sustainable Campus

2008 Present

A core organization tasked with promoting campus sustainability to fulfill the SSD.




Environmental Reports 2016

HOKKAIDO UNIVERSITY

12

1-2. Organization

(1) Center for Sustainability Science



2008 2015

Diploma programs for grad. students to cultivate a comprehensive view on sustainable issues & solutions.

Graduates

- Hokkaido Univ. Inter-department Graduate Study in Sustainability (HUGS Program):
- Special coordinated training program for Sustainability Leaders & Sustainability 'Meisters' (StraSS Program):



1. Footprint of HU's Contribution

1-1. Univ. Policy

1-2. Organizations

1-3. Major Activities

1-4. Collaborative Education Programs



14

1-3. Activities

(1) Sustainability Weeks

2007 Present

A period of intensive discussion to pave the way for a sustainable society





- The cumulative number of
- Programs: 331
- Participants: >175,000 (as of year 2016)



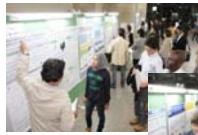
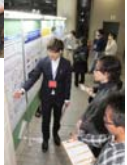
15

1-3. Activities

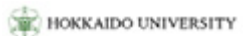
(2) Sustainability Research Poster Contest

2009 2013

To encourage students to review their research from a viewpoint of its contribution toward the realization of a sustainable society


- 100 presenters/year from various academic filed.
- Presenters from HU and partner universities.
- Presentations are evaluated by peers and researchers those who have different expertise.



1-3. Activities

(3) Global Issues Forum for Tomorrow

2010 Present

Two-hour live internet forum for high school and college students all over the world to address global issues.



北海道大学から世界へ未来へ



GiFT2016
November 27, 2016
8:00 p.m.-10:00 p.m. (GMT+9).
<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/>



1-3. Activities

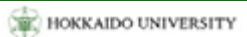
(4) ProSPER.Net

2008 Present

An alliance of leading universities in the Asia-Pacific region that are committed to integrating SD into grad. curricula.




Launching Ceremony @ HU in 2008

19

1. Footprint of HU's Contribution

- 1-1. Univ. Policy
- 1-2. Organizations
- 1-3. Major Activities
- 1-4. Collaborative Education Programs**

HOKKAIDO UNIVERSITY

19

1-4. Educational Program (1) ESD Campus Asia

2010 ■■■ Present



ESD Campus Asia
In School of Education, Hokkaido University, Japan
Visiting Model: University of Tsukuba, University of Tokyo, Kyoto University, Osaka University, Tohoku University, Hokkaido University, August 10-15, 2010

HOKKAIDO UNIVERSITY

20

1-4. Educational Program (2) PARE Program

2011 ■■■ Present

To train global leaders to change the negative PARE chain into a positive one



PARE
Populations-Activities-Resources-Environments Chain

- Chulalongkorn Univ
- Kasetsart Univ
- Thammasat Univ
- Bogor Agricultural Univ
- Institut Teknologi Bandung
- Universitas Gadjah Mada

HOKKAIDO UNIVERSITY

21

1-4. Educational Program (3) Hokkaido Summer Institute



Lapland Univ. Helsinki Univ.
Aarhus Univ.
Karolinska Institute
Russian Academy of Sciences
Stanford Univ., The Univ. of Edinburgh, Cardiff Univ.
Univ. of Groningen, Univ. of Amsterdam
Technical Univ. Munich
Univ. of Padua, Univ. of Pisa
Strasbourg Univ.
Univ. of Barcelona
Univ. of Zambia
UCLA, Univ. of Wisconsin, Univ. of Washington Univ. of Alaska Fairbanks
Univ. of Montreal, Univ. of Alberta
KAIST, Seoul Women's Univ.
Nanjing Univ.
The Australian National Univ., Univ. of Technology, Sydney
Singapore Management Univ., Univ. of Singapore
Univ. of Peradeniya and more

- HSI2016
 - 71 courses
 - 107 Students &
 - 103 Researchers from overseas

HOKKAIDO UNIVERSITY

22

1-4. Educational Program (4) New Graduate Schools



Graduate School of

- ✓ Global Infectious Disease
x Univ. College, Dublin
- ✓ Global Food Resources
x Univ. of California, Davis
- ✓ Medical Science and Engineering
x Stanford Univ.

HOKKAIDO UNIVERSITY

2. Harvested fruits for a decade

As a result of responding to global calls, Hokkaido Univ. could



- ✓ increase awareness among faculty members & students of SD
- ✓ start inter-disciplinary education programs for SD
- ✓ start internationally-collaborative education programs for SD

HOKKAIDO UNIVERSITY

3. Future Perspective
(1) Sustainability Weeks 2.0



+



From Summer 2017

*Off-curricula discussion opportunities
with students & researchers gathering from the world to
contribute to the resolution of global issues*

HOKKAIDO UNIVERSITY

3. Future Perspective
(2) SDGs & Universities



To contribute to the SDGs, we'd like to find through this symposium:

- ✓ *What should be "new set of values" for education and learning?*
- ✓ *What type of environment should be prepared in order to foster new actions for education and learning?*

HOKKAIDO UNIVERSITY

26

Thank you for your attention



HOKKAIDO UNIVERSITY

招待講演 1: SDGs達成のための高等教育の役割



キンバリー・D・スミス

AASHE（米国の高等教育における「持続可能な発展」に向けた活動を促進する非営利団体）理事
大ポートランドRCEコーディネータ
ポートランド・コミュニティ・カレッジ シルバニア・キャンパス
社会学講師

要旨

持続可能性を追求する取り組みは、世界中で拡大し続けています。しかし持続可能な未来を実現するには、より広範なイニシアチブによる連携と、支援活動の拡大により、全体的な影響力を高めていく必要があります。

今回のプレゼンテーションでは、国連の2030アジェンダと 持続可能な開発目標（SDGs）、持続可能性教育に関するユネスコのグローバル・アクション・プログラムといった、国内外の主導的イニシアチブを概説します。具体的なプログラム、ネットワーク、アウトリーチ活動および評価ツール等を通して、高等教育機関がどのように関与し、その影響力を高めることができるかを、実際の事例から探っていきます。その成果から、こうした新たなイニシアチブがどのように実施され、評価されてきたを明らかにした上で、持続可能な未来をさらに推進していくために、高等教育機関がその内部で、あるいは互いに協力して、またその枠組みを超えて、教育訓練を推進し、社会の認識を高めていく方法を提言します。

略歴

キム・スミス博士はインディアナ大学で環境社会学と社会運動を専攻し2000年に 社会学の博士号を取得。1996年よりポートランド・コミュニティ・カレッジ（PCC）で社会学を教える。また国連大学でESD地域拠点（RCE）に認定されている大ポートランド持続可能性教育ネットワーク(GPSEN)のコーディネータを務める。 その一方でPCCの サービスラーニングコーディネーター、ティーチングラーニングセンターコーディネーター、PCCサマーサステナビリティインスティテュートの研修コーディネータを務め、ポートランドの多くのNPOと 密接に協力している。また2012年国連地球サミットリオ+20に、高等教育機関サステナビリティ推進協会（Association for the Advancement of Sustainability in Higher Education）（AASHE）代表として出席。現在AASHEの理事を務める。ESDの国連パートナーシップ国際フェロー。2014年ユネスコESD世界大会で米国派遣団のリーダーを務める。教育と市民参加による持続可能な未来の推進に希望を与える取り組みに力を入れている。

The Role of Higher Education in Achieving the Sustainable Development Goals

INTERNATIONAL SYMPOSIUM COMMEMORATING THE 10TH ANNIVERSARY OF THE
SUSTAINABILITY WEEKS
HOKKAIDO UNIVERSITY
OCTOBER 29, 2016
DR. KIM SMITH

1

Four Inspiring Philosophies

- ❖ The Frontier Spirit
- ❖ Global Perspectives
- ❖ All-round Education
- ❖ Practical Learning



2



3



4

Where is Portland, Oregon?



5



6



7



SDG 4.7: Education for Sustainable Development (ESD)

Goal 4 - Ensure inclusive and equitable quality education and promote life-long learning opportunities for all.

4.7 - By 2030, ensure all learners acquire knowledge and skills needed to promote sustainable development, including among others through education for sustainable development and sustainable lifestyles, human rights, gender equality, promotion of a culture of peace and non-violence, global citizenship, and appreciation of cultural diversity and of culture's contribution to sustainable development.

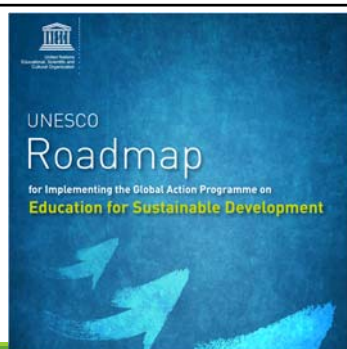
9

Ahmedabad Plan of Action (2016)

We acknowledge the **responsibility** that higher education and TVET institutions bear in the pursuit of Agenda 2030 and the sustainable development goals. Through **teaching, research, and civic engagement**, we can examine the existing cultures and structures of higher education and society, address **competencies**, utilize diverse pedagogical **strategies**, and contribute to the **transformation** of societies as co-creators of a sustainable future.

Higher education can serve as an engine of change and implementation for all 17 SDGs.

10



11

UNESCO's Global Action Programme on ESD Priority Action Areas

- 1 Advancing policy
- 2 Transforming learning and training environments
- 3 Building capacities of educators and trainers
- 4 Empowering and mobilizing youth
- 5 Accelerating sustainable solutions at the local level

12

Advancing Policy:
Missions and Strategic Plans



13

Association for the Advancement of
Sustainability in Higher Education (AASHE)



14

AASHE Campus Sustainability Hub



15

Transforming Learning and Training Environments

- ✓ Operations
- ✓ Green Construction
- ✓ Energy Consumption
- ✓ Purchasing
- ✓ Waste Reduction
- ✓ Transportation
- ✓ Learning Gardens
- ✓ Hiring Practices
- ✓ Accreditation



16

Building Capacity of Educators and Trainers



- ✓ Professional Development
- ✓ Conferences
- ✓ Sustainability Curriculum Trainings
- ✓ Multi-Sector Partnerships
- ✓ Research Opportunities
- ✓ Resource Clearinghouses

17

Building Capacity of Educators and Trainers

- ✓ Green Outcomes
- ✓ Sustainability-Related Courses
- ✓ Sustainability Degrees and Focus Awards
- ✓ Applied Learning Opportunities
- ✓ Green Initiative Funds



18

Research and Social Change:
Should Professors Profess?



Marc Edwards,
Professor of Civil Engineering, Virginia Tech U
Researched Lead Pipes in Flint, Michigan



Marcia Chatelain
Professor of History, Georgetown University
#FergusonSyllabus

Empowering and Mobilizing Youth

- ✓ Living Labs
- ✓ Course-Based Assignments
- ✓ Career and Leadership Development
- ✓ Internships
- ✓ Portfolios



Empowering and Mobilizing Youth

- ✓ College and Youth Networks
- ✓ Virtual Youth Conference
- ✓ Train-the-Trainer Workshops
- ✓ Service-Learning
- ✓ Sustainability Focus Awards



Accelerating Sustainable Solutions at the Local Level

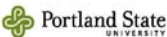
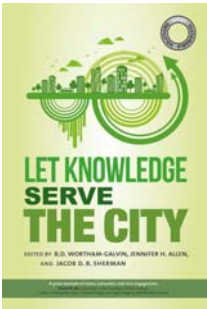


- Community-Based Learning
- Civic Engagement
- Community Partnerships



A New Book!

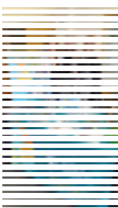
Research on sustainable solutions,
community collaboration,
and civic engagement.



Outreach & Impact



How do we tell our stories?
How do we increase our collective impact?






✓ On-line Multi-Choice Qs
 ✓ 30 international questions
 ✓ 20 local questions
 ✓ Covers full scope of sustainable development

25

United Nations University
 Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)



26

Regional Centres of Expertise on Education for Sustainable Development



RCEs around the world

www.rce-network.org

27



GREATER PORTLAND SUSTAINABILITY EDUCATION NETWORK
 A Regional Centre of Expertise on Education for Sustainable Development

Educate ~ Empower ~ Engage

www.gpsen.org

28

What does it mean to be a global citizen?




Commodore Matthew C. Perry

29

International Friendships




Kyoto University Sustainability Symposium
Papahānaumokuākea Marine National Monument

30

We're all in
this together.



*Let's increase our
handprints!*

31

Arigatou gozaimasu! Thank you!

Comments? Questions? Ideas?

Dr. Kim Smith
kdsmith@pcc.edu



32

招待講演 2: リスク社会における不確実性を生きるための知識とは ～チェルノブイリ後のドイツにおける市民の"方向性の知"に基づいて～



高雄綾子
フェリス女学院大学 准教授

要旨

現代のリスク社会では、先の見えない不確実性が増している。持続可能な発展を目指すためには、この不確実性に向き合い、次の行動に踏み出すための知識である「方向性の知」を獲得する学びが、コミュニティレベルで展開される必要がある。

ここでは、リスク社会論の嚆矢となったチェルノブイリ原発事故後のドイツにおいて、市民が不確実性に対処するために展開した学びと実践に焦点を当て、この知識獲得プロセスについて検討する。

略歴

日本大学文理学部独文学科卒業、東京都立大学大学院都市科学研究所修了、東京大学大学院教育学研究科修了、フェリス女学院大学国際交流学部准教授。主要業績「ドイツ・脱原発への市民の学習リスク認識から地域再生へ」『地域学習の創造』（共著、東京大学出版会、2015年）

リスク社会における不確実性を 生きるための知識とは

ー チェルノブイリ後のドイツにおける市民の“方向性の知”に基づいて ー

SWiO周年記念 国際シンポジウム

～持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方～

2016年10月29日(土) 北海道大学

フェリス学院大学国際交流学部 高雄綾子

グローバルな統合EUの不確実性とリスク

- EU官僚の主導する運営や規制への反発
- 移民・難民と主権・国境管理・失業問題
- 産業間・地域間と世代間の格差・相違

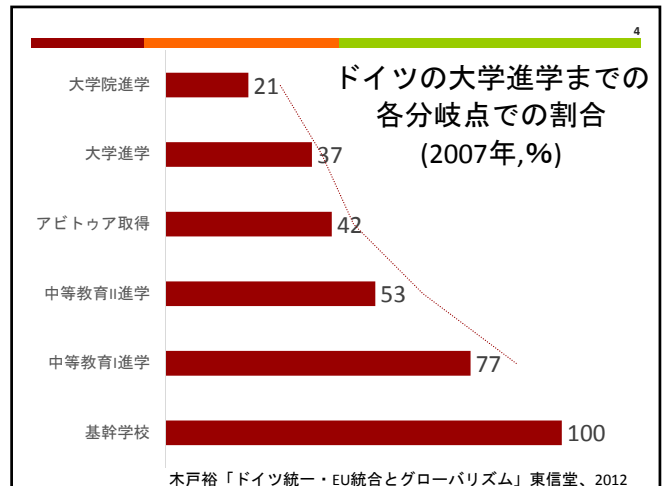
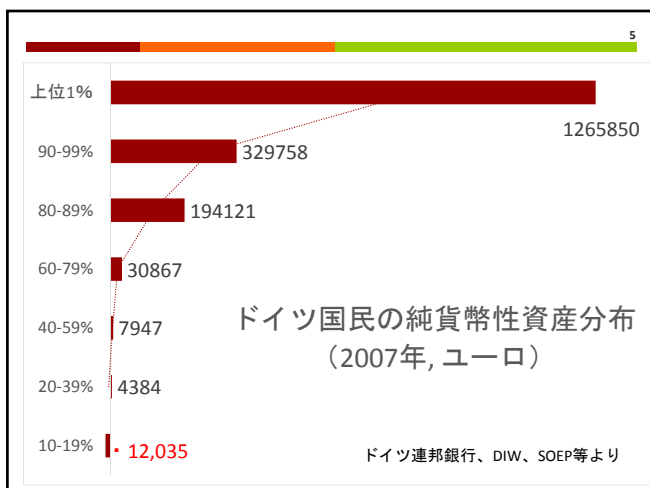
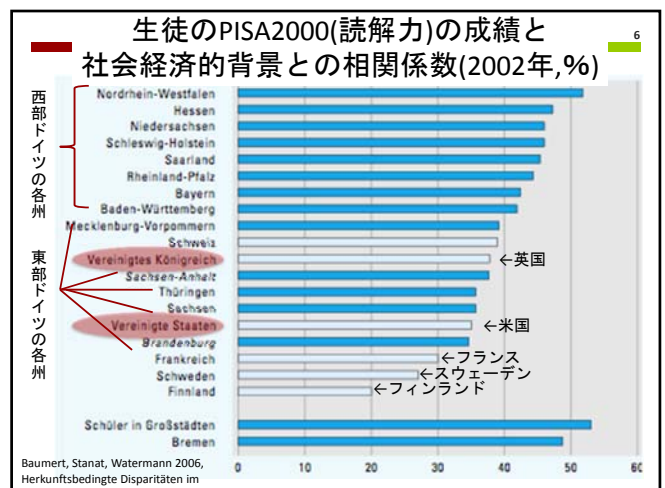
解決のための意思決定機関が遠くなることで、社会を秩序立てていた骨組みがもろくなる

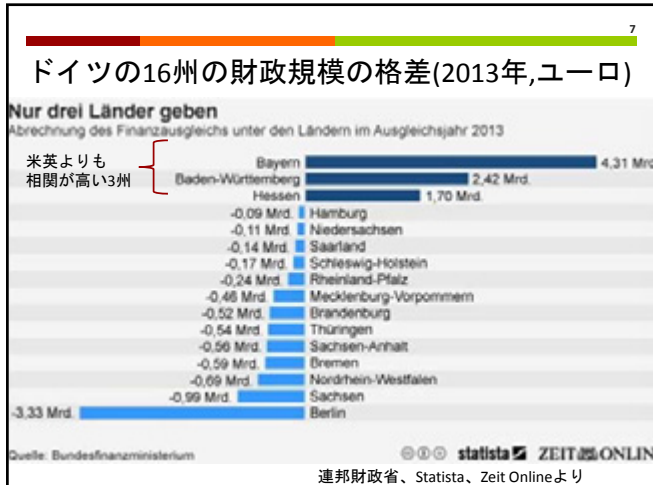
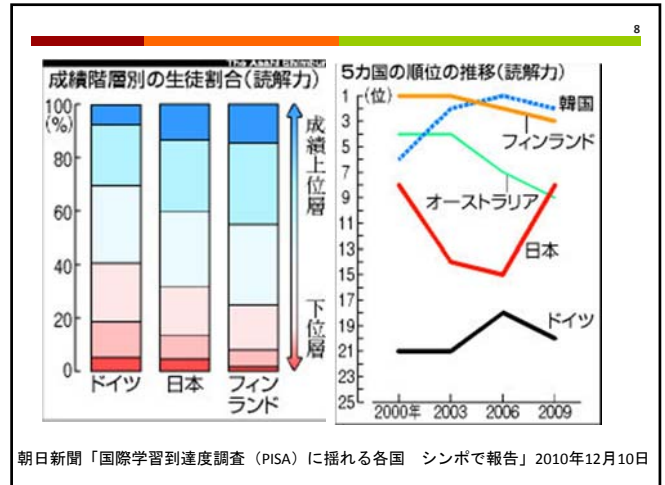
我々は「自己生成していく**不確実な条件下**で、未来を決定しなければならない世界」に生きている (Beck 2007, 26)

EU/マーストリヒト条約('92)による (高等)教育のグローバル化の始まり

- **ヨーロッパ次元**の教育を発展させること
- とりわけ学位および学習期間の**大学間の承認**を促進することにより、学生および教員の**移動**を促進すること。
- 教育機関の間の**協力**を促進すること
... (第三章 第126項 教育)

2007～2013年のEU教育統合計画で最も多くの予算(40%)が投入されたのは「高等教育」





9

グローバル化に付随するリスク

- ✦ 高学歴エリートによるEUの肥大化・官僚化を直接コントロールできない。民主主義の欠如。
- ✦ グローバルな学歴競争に乗れない人々の方が多いドイツ。国内格差が理由。
- ✦ それにかかわらず平等に降りかかる生活、安全、環境などにおけるリスク。

「不確実性はますます社会経験の基盤となっていき、人生や生活のリスク問題が増大する。その解決にもはや唯一の正解はなく、矛盾に満ちた、多様な選択肢があるだけである。」(Bonß 1996, 173)

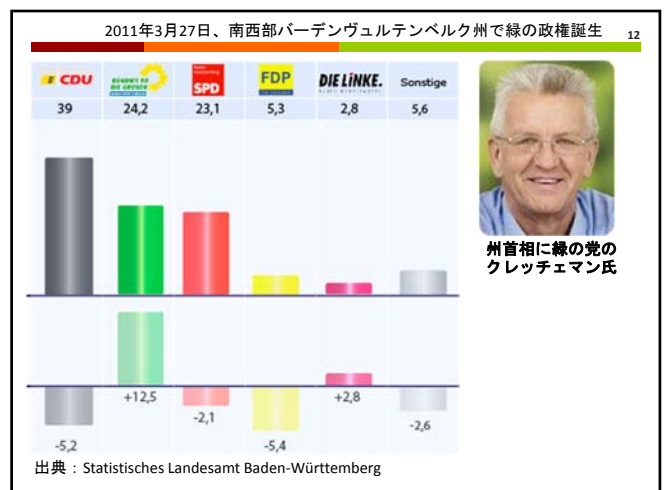
2015年3月9日(月)、朝日新聞社の浜離宮朝日ホール(© picture alliance / dpa)

ドイツのエネルギー政策におけるリスク認識の変化

「極めて高度な科学技術を持つ国で福島のような事故が起きたのを目の当たりにし、(原発には) 予想しない『残余リスク』が生じることを認識した」

2011年3月15日 閣議を終えたメルケル首相が官邸で記者会見

「『原発稼働延長法』を事実上3ヶ月間棚上げし、古い原発7基を緊急に停止し、フクシマのような事故が起こる可能性について検証する」



2011年3月28日 ベルリンのキリスト教民主同盟の党本部で「敗北宣言」の記者会見



前日のバーデン・ヴュルテンブルク州の選挙で、キリスト教民主同盟が58年ぶりに敗退。史上初めて緑の党の首組が政権を奪取

2011年3月26日 ベルリン反原発デモ



このような「異議申し立て文化」がドイツで結実したのはなぜか?

19

ドイツのリスク管理への行政介入の変化

福島の前電原発事故の後、は、残余リスクにも介入する「脱原発」を決定。

脱原発は「科学」よりも「倫理」を重視したもの。

「科学」と「倫理」が同列に扱われるようになった契機は？

高リスク

危機 (Gefahren)

危機の排除 (Gefahrenabwehr)
確実な国家介入を要する。国民の生命・身体・財産の保護を目的とする。

リスク (Risiko)

リスクの予防 (Risikovorsorge)
適切な国家介入を要する。リスクの低減が目的で、不確実性も大きい。

残余リスク (Restrisiko)

受忍すべきリスク
国家介入は許されない (法的に許容されたリスク)

低リスク

(下山憲治「ドイツ公法におけるリスク管理手法研究序説」『行政社会論集』第15巻第1号、37～38ページ)

20

チェルノブイリ事故後の3つの反応に見るリスクに向き合う市民の学び

Women in action:

fighting against nuclear ...

for the members of the network for the anti-nuclear movement 2005. No more the choice: Sun - Wind - Water - Biomass

21

1. 「怒り」の表現の強化

原発や中間処理場の立地地域（田舎）での反原発デモ展開

ゴアレーベン最終貯蔵施設候補地での建設反対運動の中心人物マリアンネ・フィリッツェン氏 (TBS「秘話開封...ドイツのメルケル首相が脱原発決めた瞬間」2012年3月24日放送)
http://www.dailymotion.com/video/3mm7n_w012412?www.asahi.com

22

2. 不安の表明と共有

小さな子どもを持つ親たちを中心とした市民測定活動

表1: ドイツ（独逸）のベルリン市民放射線測定活動の概要。市民がインターネットなどで資金を集めて設立した。クリスマス前には子どものお菓子箱、小袋の砂糖には各袋から少量を集めて検査して放射線量を測る。地域や職業から選んだ食品を測定する。1997年10月。Photo by Rüdiger HIRSHKAMP.

表2: 測定所が作成したニュースレターを夏ながら買物をする主婦、店員や客が放射線量を測定する。店員が測定器を貸出できない人々が店員に利用する。ベルリン。07年10月。Photo by Rüdiger HIRSHKAMP.

表3: 肉類の肉は、食品の放射線検査の結果がベルリンで発表されて取り出されている。65ヘルレルの肉は危険とされ、販売を中止したと書かれている。07年10月。Photo by Rüdiger HIRSHKAMP.

市民グループによる独立測定の開始

全国で40カ所以上。小さな子どもを持つ母親たちと、物理学や生物学の専門知識を持つインテリ層が中心。

市民測定グループ	都市	州
独立系放射線測定所/放射線テレックス	ベルリン	ベルリン
放射線ルーベ	ベルリン	ベルリン
汚染されていない食品を求める消費者の会	キール	シュレスヴィヒ・ホルシュタイン
人間自然研究所	フェルデン	ニーダーザクセン
放射線測定技術協会	ミュンスター	ニーダーザクセン
残余リスクに対抗する親のイニシアチブ	リンゲン	ニーダーザクセン
ガンマ測定所	ケルン	ノ르트ライン・ヴェストファーレン
残余リスクに対抗する親のイニシアチブ	ヴィースバーデン	ヘッセン
ミュンヘン環境研究所	ミュンヘン	バイエルン
土壌と植物	ケーニヒスドルフ	バイエルン
MGA フリューステンフェルトブルック	カウフボイレン	バイエルン

主な独立系市民測定グループ

24

母親の主観的な不安と専門家の客観的な知識の融合

母親グループの代表 エリザベートさん

1989年2/3月の検体ミルクナッツチョコレート。「<53Bq/kg>」の文字が見える

➤ 1986年の初夏、3児の母でオペラ歌手のエリザベートさんは、政府の対応に不信感を、事故後1週間後から母親達のグループで汚染されていないミルクの共同購入を行っていた。

➤ 物理学者ヴェルニック博士は、行政の食品測定の現状に満足せず、所有する測定器で自宅で測定していたが、市内の流通食品の獲得に苦心していた。

➤ この2人が出会うことによって、母親のニーズと科学者の専門知識が結びついた独立の市民放射線測定所の構想が持ち上がる。

139

25

市民目線で行政情報の不十分さをカバー



放射線防護協会の編集長デルゼー夫妻

翌年に市民測定所が検出した基準値 (100Bq/kg) 超え食品の例

1月26日	ベビーフード(182)
2月2日	パスタ(107)
2月9日	牛乳(187~305) 生クリーム(211~293) ヘーゼルナッツ(211~293)
3月2日	フランス産ハーブティー(4485)
3月23日	チーズ(132)、パスタ(118)

- 公的機関の測定では、商品名、工場名などの詳細な情報は記載されない。また生鮮食品のみ。
- 西ベルリン市(当時)の場合、月に約2,500サンプル以外の食品はノーチェックで流通
- 市民測定所は、スーパーに流通している加工食品を対象に、**商品名、原産地、製造加工日、製造者固有番号、メーカー名、販売店舗名も公開**
- 推奨する基準値も公的機関よりもかなり厳しかった。
- 日々の生活の「リスク不安」を解消する情報の正当性が示された。

26

3.再生可能エネルギー自治

市民が各地で草の根の再生可能エネルギー会社を設立

例：「原子力のない未来のための親の会」→シェーナウ電力会社



2011年ゴールドマン環境賞受賞ウルズラ・スラーデック氏
(ジャンル・持続可能性、シェーナウ電力会社)
<http://www.goldmanprize.org/2011/europe>

27

「リスク」に向き合うなかで獲得した意思決定への主観的な関与

- 「危機は主観や状況に左右されない。これに対しリスクは常に、ある不確実性に対する主観的な意思決定を前提とする」(Bonß 1995; 53)
- ただし個人から見れば、**主観的な意思決定の余地が全くなく、そこから疎外されていることがすでに危機に直結したリスクとなる。**

意思決定からの疎外というリスクに、どのような学習プロセスで取り組むべきか?

それが適切に行われるには、どんな社会的、心理的視点を配慮すべきか?

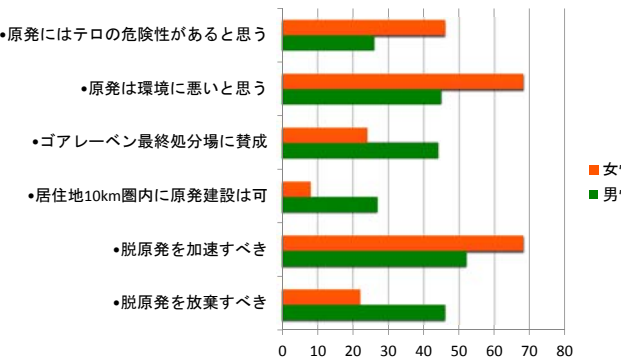
28

リスクに向き合う学習プロセスのゴール～ESDとSDGsへの示唆～



29

男女の原発への見解の違い



意見	女性 (女性)	男性 (男性)
• 原発にはテロの危険性があると思う	45	30
• 原発は環境に悪いと思う	65	45
• ゴアレーベン最終処分場に賛成	25	45
• 居住地10km圏内に原発建設は可	10	30
• 脱原発を加速すべき	65	50
• 脱原発を放棄すべき	25	45

Greenpeace Magazine, 2005, Ergebnisse der Emnid-Umfrage zur Einstellung der Bevölkerung zur Atomenergie

30

女性の原発リスクへの不安に現れる意思決定における構造的な不公平

- 意思決定に影響を及ぼす可能性が低いほど、リスク感覚は鋭くなる。
- 女性の権限や影響力は原則的に男性よりも制限されているため、このような大きな差が出てくるのではないかと説明できる。

一般的なリスク認識の度合いの高さ(性差、教育、収入、人種等カテゴリーごと)



Slovic, P. (1999): Trust, emotion, sex politics, and science: surveying the risk assessment battlefield. In: Risk Analysis, Vol.19, No.4

31

不安に向き合う市民測定活動の学習プロセス

1. 小さな子どもを持つ母親や妊婦など、リスクへの脆弱性の高いグループは、不安からリスクを高く認識する傾向がある。
2. しかしこのようなグループは通常、意思決定に関与できる構造になっていない。意思決定から疎外された状況は主観的な不安を増幅し、無知が脅威となり、再び高いリスク認識に陥らせるという悪循環を生む。
3. 構造的に不公平なリスクに対し、不安の正当性を基盤とした市民測定活動では、普通の市民が放射線や測定技術を学ぶことで、リスクを「制御できる」、「知っている」と感じる感情が生まれた。
4. これが「不安」と「怒り」を結びつけ、不安に正当性を与え、市民を次の行動に向けてエンパワメントしていった。

32

学習プロセスの社会的、心理的な要素

1. **信頼**：不安を正当化し、コミュニティに受け入れられるという感覚。不確実な未来や無知という条件下での行動に確実性をもたらす。「システム外部の不確実性（客観的な知識）の欠如は、システム内部の確実性（信頼）によって補足される（Luhmann 1989, 16f）」
2. **曖昧さへの耐性**：少ない情報や知識から来る無力感を緩和し、複雑で展開が読めない状況を耐えることができる力。客観性を強く求めすぎない。（Fenkel-Brunswik 1949）
3. **感情**：認知的判断は感情と深く結びついており、人はその均衡を保とうとする。「制御できる」、「知っている」という感情が実際の問題解決能力と行動力を促進する。「警告レトリック」では行動は制限される。

33

学習プロセスのゴールとしての「方向性の知」 (Orientierungswissen)

1. **多様なアクター**間の行動や状況の複雑な相互作用を考慮しつつ、ある程度不確実性に対処できるようになるための学習は、日常的、もしくは学術的にも、社会の行動範囲を規定する「**方向性の知**」を生み出す。
2. 不完全で不確実な状況においても無力感に陥らず、そこから問題解決に向けて最大限の有効な情報を引き出し、方向感覚のように次の行動指針を自ら作り出すことのできる能力。客観的な専門知識と並びリスク社会に不可欠。
3. コミュニケーションプロセスに参加する各アクターの**個人的、社会的視点が配慮された学習環境**でのみ、「方向性の知」の獲得が可能となる。

Evers, A., Nowotny H. (1987). Über den Umgang mit Unsicherheit. Die Entdeckung der Gestaltbarkeit von Gesellschaft. Frankfurt: Suhrkamp

34

その後のドイツの科学技術政策の変化

1. 脆弱性の高いグループを考慮した規制科学（レギュラトリ・サイエンス）の見直し
2. リスクコミュニケーションにおける参加アクターの増加
3. 連邦文部省の助成金による学際的な社会エコロジー研究 (Sozialeökologische Forschung)の発足
4. 多様な日常生活の参加者の経験知の協働

Schultz, I. (2006): Frauen aktiv gegen Atomenergie – Spuren in der Wissenschaft. In: genanet, Röhr, U.: Frauen aktiv gegen Atomenergie – wenn aus Wut Visionen werden.

35

SDGs「最後の人を最初に」アプローチ

- あらゆる形態・規模の貧困をなくし、すべての人が尊厳と平等、健康な環境の中で自己実現を図れるようにする「誰も取り残さない」アプローチ
- MDGsでは、「貧困を半減する」ために、やりやすい、効率よくできるところからやる、という手法がとられたが、SDGsは「最後の人を最初に」として、一番厳しい状況に置かれている人々にまず最初にアプローチする
- 「エボラ」や「IS」の爆発的拡大という失敗を踏まえて、「取り残される人が世界を脅威に陥れる」教訓

http://www.un.org/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

36

「方向性の知」からのSDGsとESDへの示唆

「ESDコンピテンシー」

- 不確実な未来にとって極めて重要なテーマや学習領域は**学際的である。解決すべき（持続可能な）問題の状況**を、適切な形で提示する。
- 客観的なディシプリンによって科目を分断するのではなく、**個人的、主観的な利害関係**（例えば健康）を考慮して、学習環境を作り上げる。

（トランスファー21「ESDコンピテンシー」明石書店、2012年、p.26）

「SDGsアプローチ」

- **感情に基づくリスク認識**を直視し適切に扱うことで、意思決定から疎外された「最後の人」にも、**主観的な安全と制御可能性の感覚**を作り上げる。
- 個人のリスク認識を適切に扱うことの必要性は、援助・被援助といった分断の視点ではなく、個人や社会が「**方向性の知**」に基づき、貧困脱却への**行動力を育成**するという目標から導かれる。

- Beck, U. (2007) Weltrisikogesellschaft. Frankfurt am Main: Suhrkamp 37
- Bonß, W. (1996) Die Rückkehr der Unsicherheit. Zur gesellschaftlichen theoretischen Bedeutung des Risikobegriffs. In: Banse, G. (Hrsg.) Risikoforschung zwischen Disziplinarität und Interdisziplinarität. Von der Illusion der Sicherheit zum Umgang mit Unsicherheit. Berlin: edition sigma, S. 165-184
- Baumert, Stanat, Watermann (2006), Herkunftsbedingte Disparitäten im Bildungswesen S. 62
- Evers, A., Nowotny H. (1987). Über den Umgang mit Unsicherheit. Die Entdeckung der Gestaltbarkeit von Gesellschaft. Frankfurt: Suhrkamp, S.12-24
- Schultz, I. (2006): Frauen aktiv gegen Atomenergie – Spuren in der Wissenschaft. In: genanet, Röhr, U.: Frauen aktiv gegen Atomenergie – wenn aus Wut Visionen werden.
- 木戸裕(2012)「ドイツ統一・EU統合とグローバリズム」東信堂
- 高雄綾子(2015)「ドイツ・脱原発への市民の学習」『地域学習の創造』東大出版会, p295-318
- トランスファー21(2012)「ESDコンピテンシー」明石書店、p.26

ご静聴ありがとうございました。

フェリス学院大学国際交流学部 高雄綾子
takao@ferris.ac.jp

全体会 1：特別講演

北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像



山下正兼
北海道大学副学長

要旨

北海道大学では、ディプロマ・ポリシーにおいて「多様な文化を理解し、人類の未来に寄与する創造的かつ指導的役割を担いうる人材の育成」を謳っている。これには「持続的発展のための教育」（ESD：Education for Sustainable Development）がめざす人材の育成が含まれていることは自明である。しかしながら、「持続的発展」（SD）に対する本学の取組は明文化されておらず、積極的にアピールする必要がある。

これを受け、北海道大学総長のイニシアチブにより、「サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム」が設置され、具体的な方策を検討することとなった。

本講演では、チームで議論されたいくつかの案、例えば、1) ディプロマ・ポリシーにおいて「世界の持続的発展のための課題解決に貢献できる人材の育成」を明記する、2) シラバスにおいて各開講科目と持続可能な開発目標（SDGs）との対応を示す、3) 全学教育にSDに関する新たな教育プログラムを開設する、4) SDに関する情報ネットワークを充実させる、などの方策を提案したい。

本シンポジウムにおける学内外から意見を踏まえ、これらの提案をブラッシュアップし、実現可能かつ効果的な施策案を総長に提言したい。

略歴

北海道大学サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム チーム長
北海道大学副学長
理学院教授
新渡戸スクール副校長



北海道大学

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク10周年記念
国際シンポジウム
～持続可能な開発目標(SDGs)に貢献する高等教育のあり方～

北海道大学における サステナビリティ教育の将来像

Future Design of Education for Sustainable Development
in Hokkaido University

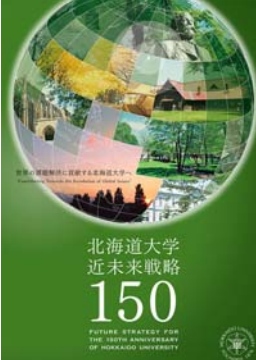
北海道大学サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム 座長
北海道大学副学長
山下正兼

Masakane YAMASHITA
Chief, President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido
University Education / Vice-President, Hokkaido University

2016.10.29

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク10周年記念
国際シンポジウム
～持続可能な開発目標(SDGs)に貢献する高等教育のあり方～

北海道大学近未来戦略150 Future Strategy for the 150th Anniversary of Hokkaido University



2026年に創設150年を迎えるにあたり
世界の課題解決に貢献する北海道大学へ
Contributing Towards the Resolution of Global Issues

社会において大学が果たすべき役割の重要性を深く認識し、「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」向けて、建学以来の基本理念と長期目標を踏まえた大学改革を大胆かつ着実に進める。

Hokkaido University profoundly acknowledges the importance of the role that a university should play in society. We have decided to boldly and steadily move forward with reforms based upon the basic philosophies we have held ever since our founding. Our long-term objective is to become "a Hokkaido University that contributes to the resolution of global issues".

研究: 様々な課題を解決する世界トップレベルの研究を推進
教育: 国際社会の発展に寄与する指導的・中核的な人材を育成
Education: Hokkaido University will produce graduates who will play a leading role in contributing to the development of a global society.
社会貢献: 学外との連携により、**知の発信と社会変革を提言**
管理運営: 総長のリーダーシップの下、**持続的な発展を見据えた大学運営**
情報発信: 世界に存在感を示す

サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education

設置の趣旨
本学では、2008年度に開催されたG8大学サミットにおいて採択された「札幌サステナビリティ宣言」に端を発し、サステナビリティ学教育研究センターの設置、サステナブルキャンパス推進本部の設置、サステナビリティ・ウィークの実施など、「持続的発展(Sustainable Development: SD)」に関する教育・研究活動を推進してきた。

2016年3月にサステナビリティ学教育研究センターが廃止された。また、社会情勢が大きく変化する中、本学が取り組むべき「サステナビリティ戦略」について、あらためて検討が必要となった。北海道大学創設150年に向け、本学が持続可能な発展を遂げ、世界の課題解決に貢献する人材を育成するためには、「持続的発展のための教育」(Education for Sustainable Development: ESD)の推進が不可欠である。そこで「サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム」が設置され、サステナビリティ教育の在り方について検討を開始した。

任務
次の事項について検討し、**総長に答申すること。**

- ・サステナビリティ教育を推進する方策
- ・サステナビリティ教育に関するネットワークの構築
- ・サステナビリティ教育の学内外への積極的な発信

北海道大学におけるサステナビリティ教育の内容には踏み込まない。
本学におけるサステナビリティ教育のシステム(枠組み、運営、発信など)を検討する。

2

サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education

構成員 Members

役職	氏名	所属
座長 副学長(理学研究院)	山下正兼	教授
Chief, President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education/ Vice-President, Faculty of Science	Masakane YAMASHITA	Professor
総長補佐(文学研究科)	神和順	教授
Advisor to the President	Kazuyori YUHAZU	Professor
文学研究科	瀬名波栄潤	教授
Graduate School of Letters	Eijun SENAHARA	Professor
高等教育推進機構	細川敏幸	教授
Institute for the Advancement of Higher Education	Toshiyuki HOSOKAWA	Professor
地球環境科学研究所	谷本陽一	教授
Faculty of Environmental Earth Science	Yoichi TANIMOTO	Professor
サステナブルキャンパス推進本部	池上真紀	特定専門職員
Office for a Sustainable Campus	Maki Ikegami	Coordinator

会議 Meetings
予備会、3/28; 本会議 1st、5/11; 2nd、7/22; 3rd、8/19; 4th、9/7; 5th、9/30; 6th、10/14

3

本講演の趣旨 The Aim of This Talk

サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム

サステナビリティ教育検討プロジェクトチームは北海道大学総長のイニシアチブにより設置された。その任務は本学におけるサステナビリティ教育の現状と課題点を整理した上で、**総長へ提言する将来構想の素案を提示すること**である。本講演ではプロジェクトチームが検討した素案に基づき、**SDGsに貢献する大学に相応しい構想**とはどのようなものかについて、指定討論者ならびに会場の参加者と共に議論を行う。

President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education

The "President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education" was **established as an initiative by the president of Hokkaido University**. The team will summarize the current state and issues of the University's sustainability education and then **present a draft proposal to the president for future strategy and action plan for sustainability education**. Based on the team's presentation, designated commentators and session attendees will **discuss the appropriate initiatives for universities that aim to contribute to SDGs**.

4

北海道大学で開講されているサステナビリティに関する科目 Sustainability-related Classes in Hokkaido University

平成26、27年度 サステナビリティに関する科目の割合は **8～11%**
FY2014 and FY2015 The ratio of sustainability-related classes is 8-11%

年度	学部 Undergraduate	大学院修士課程 Postgraduate (Master level)	博士・法科・専門職大学院 Postgraduate (Doctoral level)	合計 Total	該当率 Ratio
平成26年度 FY2014	425科目	319科目	35科目	779科目	8%
平成27年度 FY2015	415科目	343科目	88科目	846科目	11%

北海道大学では相当数のサステナビリティに関する科目が開講されている。
Many sustainability-related classes have already opened in Hokkaido University.

ASCC Sustainability-related classes are identified in our Assessment System for Sustainable Campus, Hokkaido University.

サステナブルキャンパス推進本部 調査データ

5

144

6

サステナビリティ教育に関する将来構想案 Proposal for Future Strategy and Action Plan for Sustainability Education

- 1. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies**
ディプロマ・ポリシーに「人類社会の持続的発展に貢献できる人材の育成」を明記
Declaration of the production of graduates who will contribute to the sustainable development of the human society in diploma policies .
- 2. SDGsに対応したシラバス New Syllabus and Registration System**
シラバスで各開講科目と持続可能な開発目標 (SDGs) との対応を示す
Clarification of the correlation between classes and SDGs in syllabi.
- 3. ESDプログラムの開設 New ESD Program**
全学教育に持続的発展に関する新たな教育プログラム (ESD) を開設する
Establishment of a new ESD program in the Core Curriculum (General Education Courses).
- 4. 組織整備 New Organization for Sustainable Future**
サステナビリティに関する活動の統合と全学展開を可能とする組織を整備する
Setup of a new organization in which the sustainability-related activities are unified and propagated to the whole university.

北海道大学

7

1a. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies

北海道大学の基本理念
Basic Philosophies of Hokkaido University

北海道大学における開講科目区分
Courses in Hokkaido University

北海道大学で育成する人材
Human Resource Fostered in Hokkaido University

持続可能な社会の重要性を理解する。
Understanding the significance of sustainable society.
持続可能な社会に貢献できる人材として活躍する。
Contributing to the sustainable development of the human society.

北海道大学

8

1b. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies

学士課程ディプロマ・ポリシー 現行文 (Present Undergraduate Diploma Policy)

北海道大学の学士課程教育は、世界における市民としての自覚をもって社会に参加できること、専門の基礎となる学問やコミュニケーションの方法を身につけること、専門分野を広い視野の下に学ぶことをめざした教育を進めています。それを通じて、国際的に通用する高度な学問的素養をもち、的確な判断力とリーダーシップを発揮する人材を育成します。すなわち、本学は卒業生に対し、多様な文化を理解し、人類の未来に寄与する創造的かつ指導的役割を担う人材であることを求めます。

こうした人材を育成するため、本学では、4つの基本理念の下、学部ごとに教育理念、教育目標を定め、常に先進的な教育を行います。各学部で教育課程により学業を修め、学部・学科等ごとに定められた学位授与水準(学力・能力・資質)を満たし、上記能力を持つ人材として認められる学生に対し、学士の学位を授与します。

Hokkaido University promotes undergraduate education which aims students to be socially involved with the awareness of being a world citizen, to acquire communication skills and basic knowledge for a certain discipline, and to study a specialized field from a broader perspective. Through the provision of education, we produce quality graduates with academic sophistication at an international standard and capacity to provide good judgement and leadership. In other words, we expect our graduates to assimilate diverse cultures and take a creative and leading role in contributing to the future of humanity.

北海道大学

9

1c. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies

学士課程ディプロマ・ポリシー 修正案 (Suggested Undergraduate Diploma Policy)

北海道大学の学士課程教育は、世界における市民としての自覚をもって社会に参加できること、専門の基礎となる学問やコミュニケーションの方法を身につけること、専門分野を広い視野の下に学ぶことをめざした教育を進めています。それを通じて、国際的に通用する高度な学問的素養をもち、的確な判断力とリーダーシップを発揮する人材を育成します。すなわち、本学は卒業生に対し、多様な文化を理解し、創造的かつ指導的役割を担い、人類社会の持続的発展に貢献できる人材であることを求めます。

こうした人材を育成するため、本学では、4つの基本理念の下、学部ごとに教育理念、教育目標を定め、常に先進的な教育を行います。各学部で教育課程により学業を修め、学部・学科等ごとに定められた学位授与水準(学力・能力・資質)を満たし、上記能力を持つ人材として認められる学生に対し、学士の学位を授与します。

Hokkaido University promotes undergraduate education which aims students to be socially involved with the awareness of being a world citizen, to acquire communication skills and basic knowledge for a certain discipline, and to study a specialized field from a broader perspective. Through the provision of education, we produce quality graduates with academic sophistication at an international standard and capacity to provide good judgement and leadership. In other words, we expect our graduates to assimilate diverse cultures and take a creative and leading role in contributing to the sustainable development of the human society.

北海道大学

10

1d. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies

大学院課程ディプロマ・ポリシー 現行文 (Present Graduate Diploma Policy)

北海道大学大学院は、本学が掲げる4つの基本理念の下に、専攻分野における高度な教育研究と先端・学際的な教育研究を行うことにより、高度な専門性に加えて、広い視野ならびに高い倫理観を備え、人類社会の持続的発展に貢献する高度な専門家および職業人の養成を教育目標としています。

また、大学院の各課程において学位を授与される者は、次に掲げる学識・能力を身に付けている必要があります。

中略

上記の教育目標を達成し、各課程で身に付けることが必要な学識・能力を修得させるため、各研究科等において、各々の教育目標に即した学位授与方針を定めています。そして、当該方針に基づく教育課程を編成・実施し、各研究科等で求める学力、能力、資質を満たす認められる者に対し、修士もしくは博士の学位または専門職学位を授与します。

Graduate schools of Hokkaido University conduct advanced education research in specialized fields as well as leading-edge and interdisciplinary education research under our four basic philosophies. Through promoting the education research, our educational goals have been determined as to train advanced experts and professionals who can contribute to the sustainable development of the human society with high level of expertise, a wide perspective and high ethical standards.

Students are required the following educational attainment and capability to receive a postgraduate degree from the University at the completion of their education program.

北海道大学

11

2a. SDGsに対応したシラバス New Syllabus and Registration System

北海道大学

12

2b. SDGsに対応したシラバス New Syllabus and Registration System

北海道大学

13

2c. SDGsに対応したシラバス New Syllabus and Registration System

シラバス登録画面

SDGs との対応をシラバスへ登録
Clarification of the Correlation between Classes and SDGs in Syllabi

北海道大学

14

2d. SDGsに対応したシラバス New Syllabus and Registration System

シラバス検索画面

SDGsをキーワードにシラバス検索が可能
New System Enables to Search Syllabi by SDGs' Keywords

北海道大学

15

3a. ESDプログラムの開設 New ESD Program

- 独立した全学教育のコースとして設計 Planned a course in the Core Curriculum
- 1～2年で修了 Complete within freshman or sophomore
- 多くは既存の科目で併用可能 Elective course including existing lectures
- 合計10単位を修了要件 Require 10 credits
- 必修科目(2単位) サステナビリティ概論 文系理系が融合した講義 / 全体像がわかる Compulsory course (2 credits) Introduction to sustainability studies: Can view global image from arts, humanity and science
- 選択科目(以下の全学教育科目から8単位) Elective (Select 8 credits from followings)
 - 一般教育演習 Freshman seminar
 - 環境と人間 Environment and people
 - 社会の認識 Perceptions of society
 - 科学・技術の世界 The world of science and technology
 - フィールド型合宿授業(年2回、サステナビリティ概論受講が受講条件) Training camp in field (Twice per year, Open for students completed the Introduction to sustainability studies)

北海道大学

16

4a. 組織整備 New Organization for Sustainable Future

本学のサステナビリティ活動
Sustainability-related Activities in Hokkaido University

総長直轄の担当組織を設置し、現状、様々な組織で行われているサステナビリティに関する活動を統合、全学展開する。
We propose to set a new president-directed organization, in which the sustainability-related activities presently performed in various organizations are unified and propagated to the whole university.

北海道大学

17

4b. 今後の展開と可能性 Sustainable Future We Believe in

総長直轄の組織の検討課題

サステナビリティにおける大学ガバナンス: 事業戦略とアクションプランづくり
全構成員が持続可能性の問題を考え、意識する

教育・研究 Education and Research	学部・大学院でのサステナビリティ教育プログラムの確立 実践的教育の実施 イノベーション研究・実践 世界のサステナビリティ研究の実践拠点
キャンパス整備 Sustainable Campus	アカデミック・プランを支えるキャンパス整備 社会実験の場としてのキャンパスの活用
社会貢献 Outreach	長期的視野に立って社会のニーズを分析 北海道の地域課題を捉え「持続可能な北海道」に貢献 札幌サステナビリティ宣言(SSD)実現の牽引
広報・情報発信 Public Relations	教育研究活動をリオ宣言やSDGs等を援用して国際社会へ発信 基本理念および近未来戦略を世界にPR 広報拠点、情報窓口機能、総合博物館の活用 サステナブル人材育成のための大学賞

平成27年9月サステナビリティに関する提案
(総務企画部ほか)より抜粋

北海道大学

18

御静聴ありがとうございました。
御意見・御批判をいただけると幸いです。

Thank you for your attention.
We appreciate your comments and criticism.



北海道大学で開講されているサステナビリティに関する科目

学部科目

26, 27年度ともに開講されているもの（抜粋）

100年後の未来学
「大人になる」とジェンダー
2030年エレクトロニクスの旅
インフラストラクチャーの世界 ― 古代ローマから現代まで―
グローバル化と環境の社会学
ヒゲマム入門
海のふしぎ―海と人との関わり―

26年度のみ開講されているもの（抜粋）

地球に暮らす～生活と土木・建築技術の関わり～
ソ連崩壊とその後の世界
ホルモンの生物学
環境・美学・芸術

27年度のみ開講されているもの（抜粋）

アジア政治論
フェミニズム法学
ヒトとは何か：人類学入門
観光創造学の世界に触れる



北海道大学で開講されているサステナビリティに関する科目

大学院（修士）科目

26, 27年度ともに開講されているもの（抜粋）

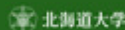
Hydrogeology (地下水保全工学E)
PARE基礎論Ⅰー人口・活動・資源・環境の連環
インバウンド・ツーリズム論演習
エネルギー・メディア変換材料科学特論
リサイクルシステム特論
温暖化影響論
家畜生産生物学総論

26年度のみ開講されているもの（抜粋）

Urban Planning (都市環境デザインE)
Water Quality Risk and Control (水・物質循環工学E)
サステナビリティ学総論Ⅰ 地球システムと人間の関わりと持続性
サステナビリティ学総論Ⅴ サステナビリティ学最前線
メディア文化特論 メディア、そして文化

27年度のみ開講されているもの（抜粋）

アイヌ・先住民研究特別講義Ⅰ
フィールド環境情報学
環境適応学総論
教育社会特論 職業能力形成特論2015
極東・北極圏の環境・文化・開発ーRUE3概論



北海道大学で開講されているサステナビリティに関する科目

科目の選定方法

156の検索キーワード一覧

シラバスキーワード検索でヒットした科目を
選定

1 LCA	31 環境化学
2 エコマテリアル	32 環境改善
3 エネルギー	33 環境管理
4 エネルギー材料	34 環境技術
5 エネルギー資源	35 環境教育
6 エネルギー変換	36 環境経済
7 グリーンツーリズム	37 環境計測
8 グローバル・イシュー	38 環境材料
9 サステイナブル・ミストリー	39 環境社会
10 ジェンダー	40 環境修復
11 ツーリズム	41 環境浄化
12 バイオマス	42 環境政策
13 バイオ燃料	43 環境工学
14 マイノリティー	44 環境設計
15 まちづくり	45 環境調和
16 ライフライン防災	46 環境動態
17 リサイクル	47 環境食料政策
18 レクリエーション	48 環境保全
19 温暖化	49 環境法
20 科学コミュニケーション	50 観光
21 火山災害	51 気候
22 海洋環境	52 気候変動
23 海洋資源	53 気象
24 開発・援助	54 環境・環境
25 環境	55 環境形成
26 環境デザイン	56 環境生態
27 環境モデリング	57 経済思想
28 環境リスク	58 芸術・芸術
29 環境影響評価	59 建築環境
30 環境衛生	60 建築計画



北海道大学で開講されているサステナビリティに関する科目

61 交通工学	91 食料自給	121 地震災害	151 民俗学
62 公害	92 食料政策	122 地方自治	152 民族学
63 公共政策	93 森林教育	123 高層バイオマス	153 木質バイオマス
64 再生可能	94 水質汚染	124 低炭素社会	154 有用遺伝子組み換え
65 再生可能エネルギー	95 水工学	125 低炭素社会	155 緑化
66 災害リスク評価	96 水収支	126 低炭素社会	156 緑地管理
67 参加型まちづくり	97 水環境教育	127 電力系統工学	
68 施設園芸	98 生育環境	128 都市環境	
69 資源環境バランス	99 生態・環境	129 都市環境デザイン	
70 資源経済	100 生態系	130 都市経済	
71 資源循環システム	101 生態系サービス	131 都市計画	
72 資源植物	102 生物多様性	132 都市農村交流	
73 持続可能	103 生物分解物質	133 土壌	
74 自然エネルギー	104 先史・歴史	134 土地利用	
75 自然環境	105 多文化教育	135 土木環境	
76 自然共生	106 太陽地球システム	136 土木計画	
77 社会システム工学	107 炭素収支	137 燃料電池	
78 社会思想	108 地域力バランス	138 廃棄物	
79 社会集団	109 地域環境・災害	139 比較民俗学	
80 社会人類学	110 地域教育	140 復旧・復興工学	
81 社会組織	111 地域居住	141 物質循環	
82 住居環境	112 地域景観	142 文化遺産	
83 住居計画	113 地域経済	143 文化財	
84 住生活	114 地域計画	144 文化政策	
85 省エネルギー	115 地域政策	145 文化政策	
86 省エネルギー技術	116 地域防災	146 文化人類学	
87 省資源	117 地域防災計画	147 保全	
88 橋生	118 地域防災政策	148 保全修復技術	
89 橋脚工学	119 地域環境	149 保全生態学	
90 食と環境	120 地産地消	150 保存・再生	



サステナビリティ活動ポータルサイト



23

北海道大学サステナビリティ学教育研究センター
Center for Sustainability Science, CENSUS

24

5.2 教育プログラムによる年度別修了者数、統計資料等

本センターが提供した教育プログラムに関係する修了証を取得した学生数を以下に示す。

修了年度	HUIGS	StraSS 環境リーダー	StraSS 環境マイスター	履修証明 プログラム	SSC
平成 20 年 3 月	8				
平成 20 年 9 月	8				
平成 21 年 3 月	14				10
平成 21 年 9 月	3				0
平成 22 年 3 月	14	0			13
平成 22 年 9 月	5	0			0
平成 23 年 3 月	19	2			3
平成 23 年 9 月	8	1			5
平成 24 年 3 月	18	8	0	3	8
平成 24 年 9 月	4	2	0	1	3
平成 25 年 3 月	12	8	0	6	7
平成 25 年 9 月	2	2	1	2	3
平成 26 年 3 月	20	12	0	9	6
平成 26 年 9 月	5	4	0	3	0
平成 27 年 3 月	25	10	0	6	7
平成 27 年 9 月	6	3	0	3	3
平成 28 年 3 月	14	8	0	6	4
計	185	60	1	39	72

CENSUS
活動成果報告書
(2016.3.31)より

北海道大学

サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム
President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education

25

基本方針

- サステナビリティ学教育研究センターのような教育組織等を新たに作るのではなく、現行の科目を上手く利用して、本学においてサステナビリティ教育を積極的に実施していることを外に向かってアピールする具体的方策を練る。
- ディプロマポリシー等に、北大(学部並びに大学院)での教育の柱の一つが「サステナビリティ」であることを明確に示す。
- 現行のサステナビリティに関連する科目を束ねて適切な名称を付した枠を作る。例えば、全学教育においては、サステナビリティに関連する科目が外から見える形になるように、全学教育科目の授業区分を修正あるいは変更する。各学部で実施されているサステナビリティに関連する科目は、第三期中期目標期間中に実施予定となっている「学部共通授業科目」に組み込み、サステナビリティ教育枠を可視化する。大学院共通授業科目の①特別科目群(社会的要請に対応するため、大学が戦略的に開講する科目)として開講する、など。
- サステナビリティ科目の必修化や副専攻化など、さらに進んだ教育システムについては、取組実績を踏まえた上で新たに検討することとし、本チームでは具体的な方策について扱わない。
- サステナビリティ科目の見える化に加え、サステナビリティに関連する科目を担当する教員や、SDGsに関する研究に関わっている教員が情報共有できるネットワークの構築を検討する。例えば、サステナビリティに関連する授業の紹介、研究論文が公表された場合の案内、関連研究・教育集会の案内などを公表できるサイトを構築し、北大におけるサステナビリティ関連情報を一元化することで、学外から本学の取組を見えやすくする。

北海道大学

座長



小内透
北海道大学大学院教育学研究院長
北海道大学大学院教育学研究院教授

指定討論者 1



キム・チャンジョン
ソウル大学校師範大学長

略歴

ソウル大学校師範大学長。1989年テキサス大学オースティン校で博士号を取得。2006年から2010年まで 国際地学教育機関 (IGEO) の委員長、同時に2004年から2010年まで国際地学オリンピック (IESO) 諮問委員会の委員長を務めた。研究の専門分野は、「日常での科学学習と社会文化的観点に立った科学の授業におけるモデリング」。

Comments on Future Design of ESD in HU

Chan-Jong KIM
Prof. Earth Science Education
Dean, College of Education, SNU



1

Sustainable Development (SD)

- "Meeting the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs."
(Brundtland report, 1987)
- Three dimensions of SD (Complex and integrated)
 - economic
 - social
 - Environmental
- Need integrated approaches in Social science, Humanities & Arts as well as Science & Engineering
- Education for Sustainable Development
 - 2005-14 "Decade of Ed for SD" (UN 2003)
 - IAU, UNESCO, UNEP/GUPES

2

Focus of discussion

- Coordinated, whole-institution approach
 - Leadership, Plan, Implementation, Participation, Assessment
- Academic Staff Development
 - Transform curricula and pedagogy towards SD
- Overcome disciplinary boundaries
- Empowering and mobilizing youth

3

HU Status

- SD Initiative continuity for last 10 years
- Many SD-related courses:
 - 8% (2014)
 - 11% (2015)
- University wide SD week
- Much more

4

Coordinated, Whole-institution Approach

- HU Proposal
 - Established "**President's Project Team**" for SD in HU, review status and plan for future
 - Establish "**President-directed Organization**"
 - Plan for every level (Diploma, syllabus & registration, Program, and organization)
 - Aligning to UN 17 SDGs

5

Coordinated, Whole-institution Approach

- Leadership: Transformative
- Plan: Systematic
 - Core curr., Elective courses, Training camps
 - Assessment and feedback (need to be visible)
- Challenges
 - Staff development
 - Overcome disciplinary boundaries
 - Empowering and mobilizing youths

6

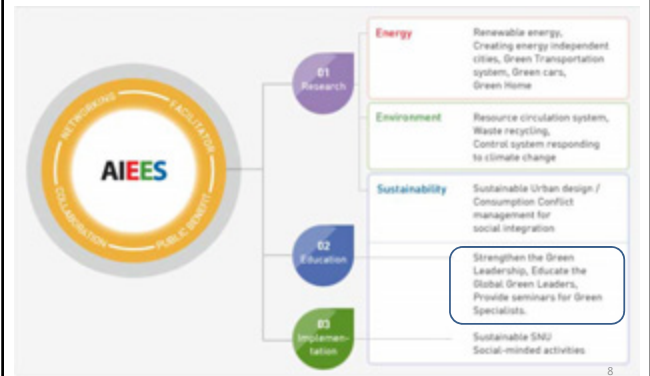
SD in SNU

AIEES Asian Institute for Energy, Environment & Sustainability
아시아에너지환경지속가능발전연구소

- Announced “**Sustainable SNU**” in 2008
- Established **AIEES** (Asian Institute for Energy, Environment & Sustainability)
 - Think-tank embodying Sustainability.
 - Collaboration in multidisciplinary researchers
 - Network between human resources and intellectual infrastructure
 - Heightening the University's social stewardship.

7

SD in SNU



8

More thoughts 1

- Need **Priorities** among 17 SDGs?
 - More urgent ones: climate change
 - **Why 2°C**
- According to the **IPCC**, global warming of more than 2°C would have serious consequences, such as an increase in the number of extreme climate events. In Copenhagen in 2009, the countries stated their determination to limit global warming to 2°C between now and 2100. To reach this target, climate experts estimate that global greenhouse gas (GHG) emissions need to be reduced by 40-70% by 2050 and that carbon neutrality (zero emissions) needs to be reached by the end of the century at the latest.

9

More thoughts 2

- Importance of ESD
 - Long-term Impact!
 - Begin with Formal Schooling
 - Research for Teacher Education
 - School, district-wide program
 - International alliance: “ESD Campus Asia” Program
 - Lifelong learning
 - Outreach
 - Community

10

More thoughts 3

- Empowering and Mobilizing youths
 - Example 1: **Our Children's Trust**
- <http://www.ourchildrenstrust.org/press-releases/>

The Court's ruling is a major victory for the 21 youth Plaintiffs, ages 8-19, from across the U.S. in what Bill McKibben and Naomi Klein call the “most important lawsuit on the planet right now.” These plaintiffs **sued the federal government for violating their constitutional rights to life, liberty and property, and their right to essential public trust resources**, by permitting, encouraging, and otherwise enabling continued exploitation, production, and combustion of fossil fuels.



11

More thoughts 3

- Empowering and Mobilizing youths
 - Example 2: **ASEAN Power Shift 2015**
 - Period: 24-26 July 2015
 - **Venue:** United World College of South East Asia (UWC SEA), Singapore
 - <http://world.350.org/singapore/asean-power-shift-2015/about-asean-power-shift-2015/>

The problem that this proposal aims to address is the **weak position the region** has in terms of **climate change policies**, and its **youth participation**, amidst its pursuit for economic prosperity. This is largely due to inept political commitment, unsustainable industry practices and the lack of capacity needed to drive **grassroots initiated bottom up changes**.

12

- HU is a **Leading** University in ESD
 - Adopting Whole-institution Approach
 - Well Articulated Goals and Plans at various levels
 - International Collaboration and Leadership in SD and ESD
- Hope to collaborate in SD & ESD for safe and prosperous future

13

Kiitos 謝謝
Thank You Tak
 感謝您 Obrigado Teşekkür Ederiz
 Σας ευχαριστούμε 감사합니다
 Bedankt Дěkujeme vám
 ありがとうございます
 Tack

14

指定討論者 2



北村友人

東京大学大学院教育学研究科准教授

東京大学サステナビリティ学連携研究機構兼任准教授

略歴

東京大学大学院教育学研究科・准教授／東京大学サステナビリティ学連携研究機構・兼任准教授。慶應義塾大学文学部人間関係学科教育学専攻卒業。カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）教育学大学院社会科学・比較教育学科修士課程・博士課程修了。Ph.D.（教育学）。国連教育科学文化機関（UNESCO）パリ本部教育局教育専門官補、名古屋大学大学院国際開発研究科准教授、上智大学総合人間科学部教育学科准教授を経て、現職。他に、ジョージ・ワシントン大学フルブライト研究員、ダッカ大学（バングラデシュ）日本研究センター客員教授、王立ブノンペン大学（カンボジア）学長特別顧問、等を歴任。現在、日本学術会議連携会員（第23-24期）、日本比較教育学会理事を務める。主著に、『国際教育開発の研究射程―「持続可能な社会」のための比較教育学の最前線』（東信堂）、『＜岩波講座・教育 変革への展望1＞教育の再定義』（共著、岩波書店）等。

北海道大学サステナビリティ・ウィーク10周年記念国際シンポジウム
(於・北海道大学、2016年10月29日)



＜コメント＞

サステナビリティ教育を支える学習観

東京大学大学院教育学研究科・准教授／
サステナビリティ学連携研究機構・兼任准教授
北村 友人

1

はじめに

北海道大学のサステナビリティ教育

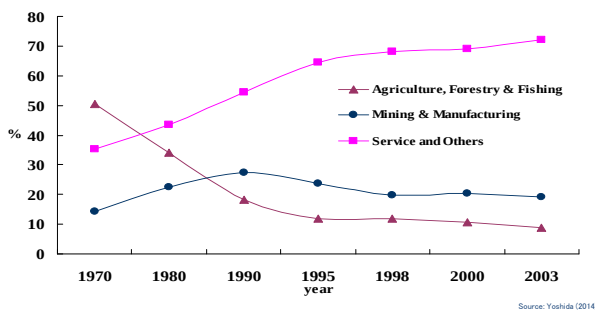
「多様な文化を理解し、人類の未来に寄与するとともに創造的かつ指導的役割を担い、世界の持続的発展に貢献できる人材」の育成



いかなる学習観に支えられているのか、について
考えてみたい

2

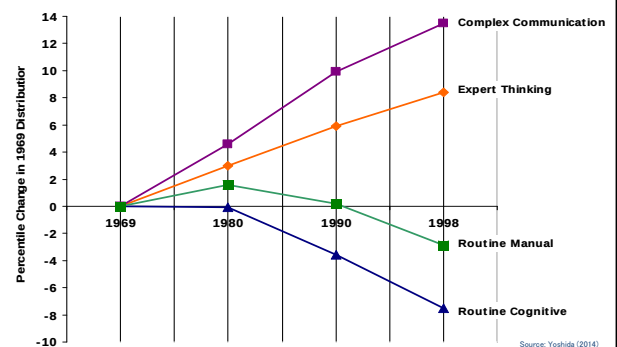
産業種別による雇用の変化(1970-2003)



Source: Yoshida (2014).

求められるスキルの変化

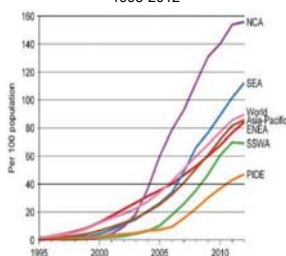
経済活動における単純労働 (routine) と非単純労働 (non-routine task) の比較
: 1969-1998 (1969=0)



Source: Yoshida (2014)

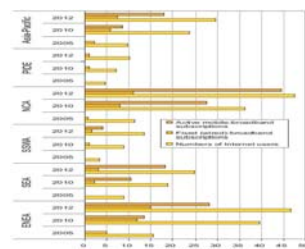
技術の革新

地域別の携帯電話契約数,
1995-2012



Source: ESCAP (2013), *Statistical Yearbook for Asia and the Pacific*.

インターネット利用者数（固定ブロードバンド及び携帯ブロードバンド契約数），2005，2010，2012



* ENEA: East and North-East Asia / SSWA: South and South-West Asia /
PIDE: Pacific Island dev. Econ / NCA: North and Central Asia /
SEA: South-East Asia

「情報公害」(Infollution)



**Information
+ Pollution
→ Infollution**

インターネットを介した情報の過剰供給が、暴力的コンテンツやネットいじめ、技術中毒など子どもに相応しくない内容をさらしている状態の「デジタル公害」を引き起こしている

<Presented by Dr. Gwan-Jo Kim, Director of UNESCO Bangkok at the University of Tokyo on December 10, 2015>

柔軟な「学び」のあり方

- 体系化された「知識」や「スキル」を身につけるだけでは、すぐに古くなってしまふ
- ひとつの「正解」を求めるだけでは、世界を理解することはできない
- 「失敗」も含めて、多様な学びの機会を逃さない
- 「学び方」を学ぶ

7

学習観の変容

伝統的アプローチ	進歩的アプローチ
市民性に関する教育 社会秩序の再生産	市民性のための/市民性を通した教育 変化への転換・適応
服従・追従 (conformity/compliance)	行動ならびに市民的社会参画 (action & civic engagement)
内容重視 (content-led)	過程重視 (process-led)
知識基盤型	原理基盤型 (principle-based)
講義による伝達	双方向的 (interactive) アプローチ 批判的解釈
教師主導型アプローチ 試験中心型	生徒主導型アプローチ 全人的発達
教科書主導型の学習環境 教科の知識	マルチメディア活用型の学習環境 生涯学習のためのスキル
模倣	創造
近代的な教授法	未来志向の教授法

出典: Tawil (2013) を参照のうえ筆者作成

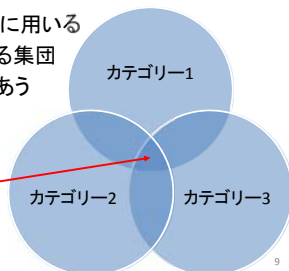
学力観の国際的な潮流

- 「コンピテンシーの定義と選択」OECD教育インディケータ事業 (Definition and Selection of Competencies: DeSeCo)

- コンピテンシー

カテゴリー1: 道具を相互作用的に用いる
カテゴリー2: 異質な人々からなる集団
で相互にかかわりあう
カテゴリー3: 自律的に行動する

反省性 (reflectivity)
(省察的な思考・行動の基盤)



9

「学び(Learning)」の5つの柱

- 知ることを学ぶ (Learning to know)
- 為すことを学ぶ (Learning to do)
- 共に生きることを学ぶ (Learning to live together)
- 人間として生きることを学ぶ (Learning to be)

『学習・秘められた宝』(ユネスコ・21世紀教育国際委員会報告書、1996年)

+

- 自分自身と社会を変革することを学ぶ
(Learning to Transform Oneself and Society)

10

SDG 4.7 の重要性

2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シティズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

⇒ ダイナミックに変化する今日の社会において、目標4.7が包含する課題は非常に重要である。

11

ESDの基礎となるグローバル・シティズンシップ教育

世界中で多くの国が多民族・多言語・多宗教などにもとづく多文化国家となっている

それぞれの国に固有の
社会文化的な価値観を重視

国を越えた
普遍的な価値のあり方についても
理解を深める

普遍的≠西洋的

サステナビリティ教育のあり方

- 学習観の**共通性**と**多様性**
 - 「**教授・学習の様式**」の変容
 - 政治的・経済的・社会文化的なグローバル競争に資する人材の育成
 - 伝統文化、宗教、言語、政治体制などのローカルな文脈（＝それぞれの社会にとって自立的な営みである教育）
- **学習成果 (learning outcomes)**を重視
- 民主的な社会の担い手である「**市民**」の育成

13

SDGsのローカル化

環境省S-11「持続可能な開発目標とガバナンスに関する総合的研究」プロジェクト(研究代表・蟹江憲史慶應義塾大学教授)において、SDGsを日本で実施していくための処方箋を考え、報告書にまとめた。

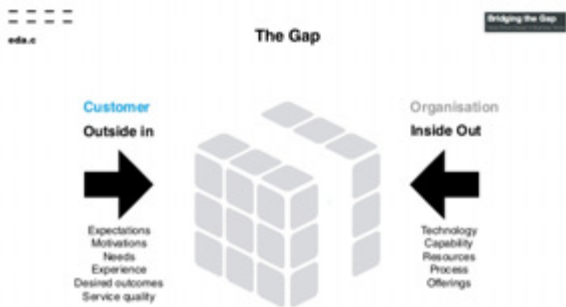
テーマ：貧困と格差社会、食料、健康、教育、ジェンダー、水、資源・エネルギー、生物多様性、ガバナンス

SDGsにもとづくカリキュラム開発のご参考になるかもしれません。



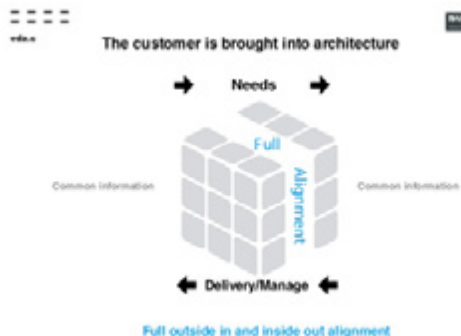
POSTBRIEF POST2015703ジュニア http://www.post2015.jp/ 14

Inside Out, Outside In –アプローチの転換？–



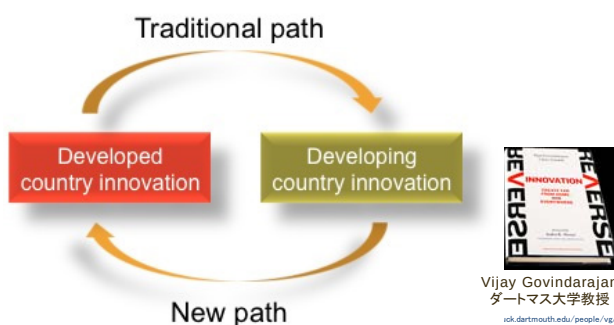
Source: Designing Experiences with Outside-In Architecture Mike Clark, Business Designer Milan Guenther, eda: Enterprise Architecture Conference Europe June 16-18 2014 (<http://www.slideshare.net/JPMCI2/designing-experiences-with-outside-in-architecture-mike-clark-milan-guenther>) 15

市民の参画 –Trans-disciplinaryなアプローチの可能性–



Source: Designing Experiences with Outside-In Architecture Mike Clark, Business Designer Milan Guenther, eda: Enterprise Architecture Conference Europe June 16-18 2014 (<http://www.slideshare.net/JPMCI2/designing-experiences-with-outside-in-architecture-mike-clark-milan-guenther>) 16

Reverse Innovation



Vijay Govindarajan
ダートマス大学教授
vick.dartmouth.edu/people/vg/

<http://ajayswamy.com/2013/08/21/reverse-innovation-and-the-role-mobile/>

結び–大いなる期待と若干の質問–

- 変化の激しい社会における「**学び**」のあり方と**学習観**の変容
 - ⇒ 北海道大学の非常に**意欲的かつ先駆的な取り組み**に対する大きな期待
- 「**普遍的**」な価値観と「**社会文化的に固有**」な価値観との間で、いかにバランスをとっていくのか
- サステナビリティ教育における**学習成果**をどのように**評価**するか

18



東京大学大学院教育学研究科・准教授
サステナビリティ学連携研究機構・兼任准教授
北村 友人

指定討論者 3



Mats Engström

駐日スウェーデン大使館 科学・イノベーション部

略歴

駐日スウェーデン大使館の科学・イノベーション参事官。前職のスウェーデン環境省国際部長・国務副長官時代にはスウェーデンと欧州の持続可能な開発に関する意思決定に携わる。またスウェーデン外務省の特別顧問および主要な科学誌の編集長でもある。工学物理学修士号を有する。

KTH's sustainability initiative

- Sustainable Campus – focus on campus activities and the development of an Environmental Management System led by the Environmental Manager
- KTH-Sustainability – focus on integrating sustainability in education, research and cooperation led by the vice-president for sustainable development.
- Two parts working together and since 2016 organized as KTH Sustainability Office.

Source: Göran Finnveden, KTH Vice-President for Sustainable Development

1

KTH Sustainability Office

- 6.5 people employed at the moment
- JPY 100 million (億円) per year (8 million kronor, 0.9 million US \$)
- Vice-President for Sustainable Development is also Director of the Sustainability Office
- EMS (14001) Environmental Manager

<https://www.kth.se/en/om/miljo-hallbar-utveckling/kontakt/organisation-och-kontakt-1.424825>

2

Sustainable development in education: Two complementary approaches

- Evaluation of the progress of integration of sustainable development on the program level
- and
- providing tools and support for Program directors and teaching staff to achieve the goals set by the university

Source: Göran Finnveden, KTH Vice-President for Sustainable Development

3

Integration of sustainable development at the program level

- 2011 – Education Assessment Exercise and career surveys pointed out the need for integration
- 2012 - all programs submitted self-assessments
- 2013 - follow-up through a dialogue with schools
- 2013 - all schools set up an action program for integration of sustainable development into their educational programs
- 2014 - all schools followed the action programs
- 2015 - a follow-up
- 2016 - new action programs set up

Source: Göran Finnveden, KTH Vice-President for Sustainable Development

4

Tools for integration of sustainable development in educational programs

- Clarification of the overall learning outcomes
- Mapping of courses and programs with ESD-relevance
- "Coaching" of teachers and Program directors, contact information on teacher resources
- Pedagogical course - Learning for Sustainable Development
- Development of a Toolbox for Teachers
- Development of course modules
- Seminars and networking
- Seed funding for developing new courses etc.

Source: Göran Finnveden, KTH Vice-President for Sustainable Development

5

Requirements for master exam

- Ability to develop and design products, processes and system taking account of human circumstances and needs and society's goal for economically, social and environmentally sustainable development.
- Understanding of technology's possibilities and limits, its role in society and human responsibility for how technology is used, including social, economic, environmental and working environment aspects.

6

Clarification of the overall learning outcomes

Students should be able to

- Reflect on and discuss the definition of sustainable development with regard to the motives, history, definitions, identifying the most important global challenges. Students should also be able to give examples of connections between ecological, economic and social sustainability.
- Critically discuss current objectives for sustainable development in Sweden, the EU and the UN.
- Describe those activities and technological solutions in society, that are within the scope of the educational programs, and which affect global and prioritized Swedish sustainability aspects. The students should also be able to discuss and evaluate various strategies to strengthen environmental impacts and prevent negative impacts.

7

- Explain economic and institutional factors that can inhibit sustainable development
- Describe, evaluate and apply general, and sectoral and technology-specific methods and strategies used in the development and design of products, processes and systems that contribute to sustainable development.
- Identify and understand the link, with relevance to the educational program, between sustainability concept and innovation.

8

- Discuss ethical aspects, especially relating to their future profession, of gender perspectives and other equity issues of sustainable development, such as the distribution of resources within and between generations.
- Connect an understanding of sustainable development (as described in the goals above) to the skills and knowledge specific for the educational program by proposing and discussing technical solutions, innovations and ideas that can contribute to sustainable development.

9

Chalmers University of Technology

- Vice-President for Education coordinating ESD
- Programme Directors responsible for ESD within the respective fields
- Different design of mandatory SD course depending on programme
- Collegial Educational Developer for ESD

10

指定討論者 4

松本宏

駐日ノルウェー王国大使館 通商技術部・シニアアドバイザー

略歴

35年間にわたりプラズマ 物理、核融合工学研究開発に携わり、その間20年以上は国際プロジェクトに従事してきた。退職後、「京」スパコン事業、欧州委員会のフレームワークプログラムであるホライズン2020に携わった後、現在シニアアドバイザーとして、またノルウェー科学技術大学(NTNU)及びベルゲン大学の日本代表として駐日ノルウェー王国大使館にて勤務する。

分科会 2：講演 1

「第10回HESD フォーラムin北海道」

開催報告

報告者：琉球大学 教授 大島 順子

HESDフォーラムは、ESDに取り組む高等教育機関がその実践等に関する様々な情報交換を行い、ESDの質の向上を図ることを目的として2007年に設立されました。この度、第10回HESDフォーラムを北海道大学のサステナビリティ・ウィークに合わせて開催することができました。開催に際し、会場のご提供ならびに運営にご協力頂きました北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局の皆さまに厚く御礼申し上げます。

午前中の大学セッションでは、五つの大学より事例報告がありました。まず、北海道大学より「ESDキャンパス・アジアパシフィック・プログラム」の成果と展望についての報告があり、続いて、立教大学のESD研究所より、大学の附置機関を通したESD教育研究の可能性とESD研究所の10年間の取り組みについてレビュー頂きました。

次に、徳島大学より、2000年以降多数の大学が取り組んだ文部科学省の「現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）」の持続可能な社会につながる環境教育の推進について、徳島大学が採択を受けて実施したプログラムの内容と実施後の展開をお話し頂きました。

そして、金沢大学からは大学のESDの取り組みをお話し頂きました。金沢大学は、さまざまな変遷を経ながら、現在もESDの関連科目を共通教育のレベルで展開している好事例の一つだと思います。

最後に琉球大学より、文部科学省の展開する「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」という、地域の課題を解決するための事業について、現状と課題を発表頂きました。全体としては、各大学が文部科学省からの様々な補助事業を受け、展開してきた／している取り組みの現状と課題、今後の方向性について、具体的な事例に基づいて忌憚のない意見交換ができたと思います。

また、学生セッションとして、北海道大学と琉球大学の学生による発表の機会を設けました。琉球大学からは、「エコロジカルキャンパス学生委員会」の活動を率直に学生目線で話しました。ボランティアであると同時に、単位付与されるキャンパスの中での活動という点が、非常に特徴的だったと思います。北海道大学は、双方向型の短期留学プログラムについて、写真を基に発表して頂きました。

今までは大学教員や大学としての報告がほとんどでしたが、昨年度より学生セッションを設けました。大学側がある目的をもって行っているものを学生はどう受け取っているか、学生の目線をきちんと知らないと、一方的なやり方になるのではないかという反省もあったためです。今年も学生側の話が聞けたことは非常に良かったと思います。

今後も、各大学の全学教育としてESDをどのように継続することが期待されているか、あるいは望ましいのかということとをざっくばらんに話し合うことができることを期待し、HESDフォーラムを継続していきたいと思います。今回の発表内容は、HESDフォーラムのウェブサイトでも公開されますので、事例の報告内容の詳細はぜひ後ほど確認して頂ければと思います。



学生発表の様子



大学セッションでの発表の様子

セッションの目的および概要

HESDフォーラムは、国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」に取り組む大学が、2007年に第1回大会を岩手大学にて開催後、自主的に集合し、立教大学、岡山大学、上智大学、徳島大学、京都大学、金沢大学、名古屋市立大学、琉球大学と開催してきました。ここ北海道大学での開催が、記念すべき第10回大会になります。

セッションのタイムスケジュール

9:30 開会

(進行：琉球大学観光産業科学部 大島順子)

HESDフォーラムについて

(HESDフォーラム代表／立教大学ESD研究所 阿部治)

【大学セッション】

9:35 ～ 9:50 『ESDキャンパスアジア・パシフィック・プログラムの成果と展望』
(北海道大学大学院教育学研究院 水野眞佐夫)

9:50 ～ 10:05 『大学の付置機関をととしたESD教育・研究の可能性
ー立教大学ESD研究所の10年間の取り組みをととしてー』
(立教大学ESD研究所 阿部治)

10:05 ～ 10:20 『現代GP「豊饒な吉野川を持続可能とする共生環境教育」の報告とその後
(改組2)～持続可能な地方発展に関する一考察～』
(徳島大学理工学部 三好徳和)

- 10:20 ～ 10:35 『金沢大学におけるESDへの取組み』
(金沢大学国際基幹教育院 鈴木克徳)
- 10:35 ～ 10:50 『地（知）の拠点として取り組む琉球大学の事業の現状と課題』
(琉球大学観光産業科学部 大島順子)
- 10:50 ～ 11:00 休憩

【学生セッション】

- 11:00 ～ 11:15 琉球大学エコロジカルキャンパス学生委員会の活動
(琉球大学 清水萌衣、宮城俊貴、用あかり)
- 11:15 ～ 11:30 北海道大学教育学部・大学院教育学院における双方向型短期留学プログラム
(北海道大学 増田風雅、真鍋優志、田中真一郎)
- 11:30 ～ 12:00 総合討論 教員&学生
- 12:00 終了

分科会2：講演2

「北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方」

開催報告

報告者：北海道大学欧州ヘルシンキオフィス 所長 成田 吉弘

2012月4月にフィンランドのヘルシンキに開設された欧州ヘルシンキオフィスは、北欧を中心とした欧州全体の大学、研究機関との学術交流のリエゾン役を果たしている。またFSP (First Step Program) や海外インターンシップなど、北大の学生が欧州で海外体験をする際の手助けをしている。欧州は持続可能な社会実現に対する関心が深い、とくに北欧はサステナブル社会の実現に貢献する教育でよく知られている。本企画は、サステナブルな高等教育に関して、先進的な取り組みをしている国々の現状を紹介する機会を設け、3人の講師を外部からお招きした。

はじめに駐日ノルウェー王国大使館の松本宏氏が、ノルウェーの高等教育における持続可能な社会の実現のための試みを紹介した。続いて、駐日スウェーデン大使館の Mats Engström氏は、スウェーデンの高等教育において実施された先進的な試みと評価を詳細に話された。バルト3国からの唯一の代表となったエストニアからは、Argo Kangro氏がノルウェー、スウェーデンとは異なる視点での持続的発展と教育の紹介をされた。最後に北大欧州ヘルシンキオフィスを代表して、所長の成田が欧州全体の高等教育の流れを総括した後、とくにFinlandの大学改革の歩みを紹介した。

聴衆は約30名であり、講演後に時間を越えて、3人の外部Kangro氏講師へそれぞれ熱心な質問が投げかけられた。札幌で北欧やバルトの国々の高等教育、とくに持続可能な社会実現に向けた試みを聞く機会はほとんどないため、次年度以降もこうした企画の継続が期待される。



エストニア大使館 アルゴ・カングロ氏による講演の様子



講演会終了後に4人の講師で記念撮影
(左から松本氏, Engström氏, 成田ヘルシンキ所長, Kangro氏).

セッションの目的および概要

持続可能な社会実現に貢献する高等教育の実施例としては、北欧（フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク）とバルト（エストニア、ラトビア、リトアニア）の国々がよく知られています。本企画では、サステナブルな高等教育に関して、先進的な取り組みをしているこれらの国々の現状を紹介いたします。

セッションのタイムスケジュール

9:55	開会
10:00 ～ 10:30	「ノルウェーの高等教育における持続可能な社会の実現のための試み」 (駐日ノルウェー王国大使館 松本宏)
10:30 ～ 11:00	「言葉から結果へ：持続的発展のための高等教育に関するスウェーデンの経験」 (駐日スウェーデン大使館 Mats Engström)
11:00 ～ 11:30	「エストニアから見た持続的発展と教育」 (駐日エストニア共和国大使館 Argo Kangro)
11:30 ～ 12:00	「欧州全体の高等教育の流れとFinlandの大学改革の歩み」 (北海道大学欧州ヘルシンキオフィス 成田吉弘)

講演者 1

松本宏

駐日ノルウェー王国大使館 通商技術部・シニアアドバイザー

略歴

35年間にわたりプラズマ 物理、核融合工学研究開発に携わり、その間20年以上は国際プロジェクトに従事してきた。退職後、「京」スパコン事業、欧州委員会のフレームワークプログラムであるホライズン2020に携わった後、現在シニアアドバイザーとして、またノルウェー科学技術大学(NTNU)及びベルゲン大学の日本代表として駐日ノルウェー王国大使館にて勤務する。

講演者 2



Mats Engström

駐日スウェーデン大使館 科学・イノベーション部

略歴

駐日スウェーデン大使館の科学・イノベーション参事官。前職のスウェーデン環境省国際部長・国務副長官時代にはスウェーデンと欧州の持続可能な開発に関する意思決定に携わる。またスウェーデン外務省の特別顧問および主要な科学誌の編集長でもある。工学物理学修士号を有する



Argo Kangro
駐日エストニア共和国大使館 Counsellor

略歷

駐日エストニア共和国大使館公使参事官。タリン大学法科大学院で学び、1997年法学修士号取得。1999年から2002年までエストニア外務省（MFA）政策担当官や大使館員を、2006年から2008年まで国家儀典部訪問儀式課長を務める。また2011年から2014年までオランダエストニア共和国大使館参事官。2014年から2016年まで外務省対外経済開発協力部（タリン）に勤務。

主催

北海道大学国際連携機構 欧州ヘルシンキオフィス

入場：無料

言語：日本語，一部英語(スライドは日本語併記)

北海道大学サステナビリティーフォーラム2016 行事

環境・社会・経済の持続可能性を追求する
Hokkaido University Sustainability Forum 2016

講演会 北欧とバルトの国々に学ぶ サステナブルな高等教育の在り方

2016年12月30日(金) 9時～12時

主催者：北海道大学国際本部、国際イノベーションオフィス、人財、教育、文化・芸術・スポーツ振興課等
後援者：学務部総務課、生活環境政策推進課、学生支援課、人権保障推進課等（注）
協賛者：北海道、一般財団法人日本学術会議、北海道庁第一高等学校、大森学園女子短期大学・通信部

本講演会は参加者に直接学ぶ高等教育の事例を通して、北欧、フィンランド、スウェーデン、エストニアなどの先進的な取り組み、その背景、社会的状況や学生の関心などについて学びます。また、各参加者が自身の所属する大学の現状について、発表機会も設けられます。

時間	内容
10:00-10:30	「フィッシャー」の高等教育における持続可能な発展の模索のための試み / 松本孝一 総合システム工学大学院教授
10:30-11:00	True words to results, Swedish experiences with higher education for sustainable development（真実から結果へ－持続可能な発展のための高等教育に関するスウェーデンの経験） Mats Engstrom 国立スウェーデン大学教授
11:00-11:30	Sustainable development and education: a view from Estonia（エストニアから見た持続可能な発展と教育） Argo Kangro 国立エストニア大学教授
11:30-12:00	「世界共通の未来像を掲げられる Finland の大学改革の歩み」 成沢貴弘 北海道大学ヘルシネスオフィス

分科会3：学生ワークショップ1

「大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる」

開催報告

報告者：環境省北海道環境パートナーシップオフィス 大崎 美佳

遠い世界の出来事として捉えがちな「SDGs（持続可能な開発目標）」。本ワークショップでは、3名の学生を招き、SDGsを使った取り組みや自身の活動とSDGsの関わりを発表いただきました。

はじめにEPO北海道から、報告書「成長の限界（1972年）」等に触れ、昔から世界の資源は有限であり、持続可能な社会を作っていくことが必要と言われてきたことを踏まえ、SDGsの経緯や特徴について紹介させていただきました。

和田恵さん（慶応義塾大学 総合政策学部4年生）からは、所属する研究室での取り組みとして、SDGsを同世代の方へ普及啓発するためにSNSを活用した情報発信、シールにしたSDGs各目標を大学構内の関連個所等に貼る「キャンパスSDGs」についてご紹介いただきました。世界の目標を自分事としてとらえてもらうための工夫を凝らした取り組みでした。

三品未和さん（酪農学園大学 環境共生学類2年生）、赤松遼太郎さん（東海大学札幌キャンパス 生物学部3年生）からは、学外の取り組みとして、お二人が所属するNPO法人ezorockの「大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクト」とSDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」や目標15「陸の豊かさを守ろう」との繋がりについてご紹介いただきました。また、登山者への長靴貸し出し等の活動一つ一つが、どのように自然保護とつながっているのか活動の効果を丁寧に説明いただきました。

発表いただいた内容は、グラフィックレコードをという手法を用いて、牧原ゆりえさん（一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ）、丸藤たつのりさん（ユースコミュニティデザイナー）にまとめていただきました。

参加者からは、「SDGsを身近に感じることができた」などの声を頂き、発表内容から多くの示唆を得ることができたようです。その後参加者には、もう一つのワークショップ「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」へ続けて参加頂きました。



ワークショップの様子



学生発表の様子

セッションの目的および概要

世界の大きな流れの1つである「持続可能な開発目標（SDGs）」。これだけ聞くと敷居が高く、自分事としてとらえることが難しく感じますが、視点を変えてみると、実は私たちとつながっていることが多く発見できます！3名の大学生の方からお話を伺ってヒントをみつけませんか。ランチを食べながら参加者の皆さんで交流できる時間にしたいと思います。気軽にご参加ください。

この後は14時からの分科会4「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」も続けてご参加ください。私たちにとって身近な存在である「教育」を通して、どのように世界の目標に貢献していけるかワークショップ形式で考えていきます。

分科会4の詳細は、[こちら](#)をどうぞ！

セッションのタイムスケジュール

12:15	開会
12:20 ～ 12:30	情報提供：世界の目標「SDG s」について
12:30 ～ 13:00	事例紹介1「大学内でのSDGsの普及啓発について」
13:00 ～ 13:30	事例紹介2「実は身近な世界の目標」
13:30 ～ 13:45	参加者同士の交流会
13:45	閉会

司会者／ファシリテーター

大崎美佳

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

事例紹介1：大学内でのSDGsの普及啓発について

講演者



和田恵

慶應義塾大学 総合政策学部4年

要旨

SDGsを中心とした環境問題を専門とする慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス 蟹江憲史研究会では、実践プロジェクトとしてSDGsの普及啓発活動に取り組んでいます。例えばインスタグラム（SNS）を利用し、SDGsと自分の関心の関連を考えてもらう活動、またキャンパス内をSDGsの17要素でカバーする「キャンパスSDGs」プロジェクトなどです。特に「キャンパスSDGs」など、学生であること、そしてキャンパスを活かしたプロジェクトについてお話します。

略歴

慶應義塾大学4年。東京出身、在住。ゼミ長を務める蟹江憲史研究会にて、SDGs（国連・持続可能な開発目標）を中心とした環境ガバナンスを専攻。SDGs達成のための国内・国際制度のあり方に関心がある。同大学院政策・メディア研究科環境デザイン・ガバナンスコース進学予定。現在、大学キャンパス内でSDGsの普及啓発プロジェクト「キャンパスSDGs」実施中。

また、学外ではこども国連環境会議推進協会、日本青年国際交流機構、NPO法人新宿環境活動ネット、OECD Student Ambassador等で活動。

在学中には、国連グローバル・コンパクト日中韓ラウンドテーブル、内閣府青年国際交流事業 Ship for World Youth Leaders、日中韓環境大臣会合等に、日本代表青年として参加。今年静岡で開催された第18回日中韓環境大臣会合では、インスタグラム枠を用いたSDGs普及啓発活動を実施した。

北海道へは小学校4年生以来約10年ぶり。ジンギスカンにわくわくしている。

事例紹介 2：実は身近な世界の目標

要旨

大学の授業で学んだ「生物多様性」。机の上では理解はできたけど、実世界ではどうなっているのか・・・学外の環境団体（NPO法人ezorock）による環境保全活動に参加して、植物と土や水の関係性などを現場で五感から言葉の意味や概念を体験することで理解がより深まりました。ここでは私たちが行う活動内容の紹介と、それがSDGsのどの目標とつながっているのか紹介します。

講演者 1



三品未和

酪農学園大環境共生学類 2年

略歴

NPO法人ezorockの大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクトで環境保全のボランティア活動を行っています。大学には野生動物について勉強したいと思い入学しましたが、1年生の授業に自然環境に関する授業があまりありませんでした。

そこで、ただ大学で授業を聞いているという受け身の体制ではいけないと思い、様々な環境活動を行っているezorockで活動を始めました。

講演者2



赤松遼太郎

東海大学札幌生物学部 3年

略歴

小さい頃から生き物が好きで、いろんな生き物を観察したり、どんなことを考えているのかを考えるのが好きでした。生き物好きがそのまま中学・高校と続いて、高校では理系の生物を選び、大学でも生物を学びたいというところからここまできました。

環境について勉強しようと思ったのはすごく最近のことで、今までは自分の好きな生物に関わる仕事をしたいけど、具体的にどんな仕事があるのかわからず、思いつくことと言えば動物園の飼育員くらいというような状態でした。

そんなとき、たまたま参加した「ふくしまキッズ」という活動を通して、ezorockと出会いました。環境というキーワードに対していろんな角度からいろんな手段でアプローチをされていて、活動に参加していく中で、やっぱり自分が環境について詳しくないとその活動の目的や意味を見出せないと思い、環境についてもっと勉強し、深めていきたいと思うようになりました。

主催

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

共催

北海道大学

後援

一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ

分科会3：対談

対談「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」

開催報告

報告者：徳島大学大学院理工学研究部 教授 三好 徳和

「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」という題にて、立教大学の阿部治先生、金沢大学の鈴木克徳先生に対談をしていただく予定であった。しかし、参加者が10余名であったため、両先生に話題提供していただき、フロアーからの質問に答える形として実施した。

簡単に内容をまとめると、まず、SDGsに関する前に、ESDに関し参加者全体での共通認識を作るためのディスカッションを行った。資本主義社会における競争至上主義から、お互いが分かち合いながら安全安心な社会を作るためにどのようにしなければならないのか。そのように価値観の変換を求めるものがESDである。

では、高等教育機関としてはどのように実施していくかが課題となる。体験プログラムで地域問題を理解するという観点からしたら、初等教育と高等教育では一見すると同じような中身かもしれない。しかしESDとしての中身は、深さが違う。高等教育では問題解決のための調査研究がなされる。

ただ、そうすると、ESDは専門教育と言うことになりはしないか。ESDとして、課題解決のための専門教育もある。しかし、ESDには、先に述べた、競争至上主義から、お互いが分かち合いながら安全安心な社会を作るために価値観の変換を求めるいわゆる「教養」も重要なことである。これらの事に関しディスカッションを行い相互理解に努めた。

SDGsに関しては、深く議論はできなかったが、post ESDとして、今後ESDを推進する高等教育機関が何を目指すべきかという有用な議論が行えた。第10回目のHESDフォーラムとしては、次の10年に向けて、総括を含めた良い議論ができたと考えている。



議論の様子

セッションの目的および概要

HESDフォーラムは、国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」に取り組む大学が、2007年に第1回大会を岩手大学にて開催後、自主的に集合し、立教大学、岡山大学、上智大学、徳島大学、京都大学、金沢大学、名古屋市立大学、琉球大学と開催し、ここ北海道大学にて開催が、記念すべき第10回大会になる。今年はまた、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」が発効した年でもあり、ポストESDとして、今後高等教育機関がSDGsに対しどのように関わっていくべきか、考えるための対談とフリーディスカッションを行う。

セッションのタイムスケジュール

- 12:15 ~ 12:30 開会並びにHESDフォーラム10年の歩みについて(紹介)
- 12:30 ~ 13:15 阿部治教授、鈴木教授との対談(事前意見聴取に関する応答を交えて)
- 13:15 ~ 13:45 会場参加者とのフリートークセッション

司会者／ファシリテーター

三好 徳和

徳島大学大学院理工学研究部

SDGsへ貢献する高等教育のあり方について

要旨

HESDフォーラムは、国連「持続可能な開発のための教育の10年」に取り組む大学が、2007年に第1回大会を岩手大学にて開催後、自主的に集合し、ここ北海道大学にて開催が、記念すべき第10回大会になる。今年はまた、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」が発効した年でもあり、ポストESDとして、今後高等教育機関がSDGsに対しどのように関わっていくべきか、あらかじめ募集した質問や意見を基に、対談形式にて講演を行う。その後、フリートーク的ディスカッションを行う。

講演者 1



阿部治

立教大学社会学部教授・ESD研究所長

略歴

1955年新潟県生まれ。立教大学社会学部・同研究科教授、専門は環境教育/ESD。現在、同大学ESD研究所長などとして、日本を含むアジア太平洋地域の環境教育/ESDのアクションリサーチを行っている。前日本環境教育学会会長（Former President, Japanese Society of Environmental Education）

講演者 2



鈴木克徳

金沢大学国際基幹教育院教授 環境保全センター長

略歴

環境省（環境庁）に在籍し、オゾン層保護、気候変動等の国際交渉、国際環境協力等に従事。その間、国連アジア太平洋経済社会委員会、世界銀行、日本環境衛生センター酸性雨研究センター、国際連合大学高等研究所（UNU-IAS）等の国際的機関に出向し、活動。UNU-IAS時代には、UNESCOとともに、国連ESDの10年（DESD）の推進を図り、DESD国際実施計画づくりなどを行う。また、ESD地域拠点（RCE）づくりを推進。現在、金沢大学で、北陸におけるESD活動を推進している。

主催

HESDフォーラム

共催

北海道大学 国際連携機構

分科会4：学生ワークショップ2

「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」

開催報告

報告者：環境省北海道環境パートナーシップオフィス 大崎美佳

本ワークショップでは、SDGsの達成に向け、よりよい地域づくりのために高等教育がどうあるべきかを参加者と一緒に考えました。まず、自分たちの暮らしや実現したい夢が、SDGsのどの目標と関わりがあるのか考え、話し合う時間をとって、SDGsをさらに身近なものにしました。

次に、牧原ゆりえさん（一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ）より「サステナビリティ」実現に向けた考え方の紹介があり、SDGsの達成に向けて高等教育がどうあるべきか参加者と意見交換をしました。高等教育に期待することとして参加者の方から「学内外の方とつながることができるオープンな場所」「無駄なことに挑戦できる」「学生結婚の推奨・支援」「シラバスを教員と一緒に作成すること」等、多彩な意見がでてきました。また、高等教育が学びの部分で恵まれた場所であるかを再認識した機会ともなりました。

最後に、大沼 進准教授（北海道大学大学院文学研究科）が全体をとって「活発なディスカッションがされ貴重な意見が出された」とまとめました。

参加者からは、「多様な意見がでたけど高等教育に求めることは皆同じでおもしろい」等、普段は会えない人と意見交換する良い機会になったという声が多く寄せられました。

2つの分科会をとってEPO北海道は、今後も持続可能な地域づくりに向けSDGsの普及啓発を行うとともに、社会の次世代の担い手である学生の取り組みや意見が国内がいへ発信される場づくり等をしていきます。分科会を開催するにあたり関係者の皆さまには改めて心より感謝申し上げます。



ワークショップの様子



参加者の集合写真

セッションの目的および概要

ここでは参加者の皆さんとワークショップ形式で、「SDGsの貢献とは?」「世界とのつながりを持つにはどうしたらいいのか?」などを学生目線から教育について考え、シンポジウム全体に意見を発信します。

ランチセッションで学んだことをヒントに参加者の皆さんと話しながら自分の想いを形にしていきませんか。もちろん、ここだけの参加も歓迎です。「SDGsに関する授業があるといい」など小さなことから、「SDGsに貢献する海外の取り組みを知るために留学制度があるといい」など大きなことまで、世界の目標と関りを持つ教育になるよう、皆さんの声を届けましょう！

ランチセッションの詳細は、[こちら](#)をどうぞ！

セッションのタイムスケジュール

14:00	開会
14:05 ～ 15:45	ワークショップ形式で世界の目標と関りを持つ教育について、参加者の皆さんと考えます！
15:45 ～ 16:00	まとめ
16:00	閉会

司会者／ファシリテーター



牧原ゆりえ
一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ

プロフィール

出産を機にサステナビリティに強い関心を持つようになり、4年間のスウェーデン滞在中に2つの修士プログラムを学ぶ。北欧滞在中に得た「自分の暮らしをハッピーにしてくれるサステナビリティに必要な学び」を日本でも伝えるべく、活動中。参加型リーダーシップの実践のグローバルのコミュニティArt of Hosting 日本支部世話人、女性のインナーリーダーシップに気づき慈しむグローバル・プログラムComing Into your own 日本ファカルティ。地方創生のためのグラフィック・ハーベスティング呼びかけ人。

<http://www.sustainabilitydialogue.vision>

主催

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

共催

北海道大学

後援

一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ

分科会4：講演1

「コンフリクトを超える知を生み出す学び ～分断社会における和解の可能性を探る～」

開催報告

報告者：北海道大学大学院教育学研究院 教授 宮崎隆志

SDGsに取り組む際に必ず浮上するのが、利害対立に起因する葛藤です。この分科会では、葛藤そのものに焦点をあてて、和解や赦しとしての平和を構築するために必要な学びを3つの事例に即して検討しました（スタッフ3人・登壇者4人を除く参加者は45名、計52名）。

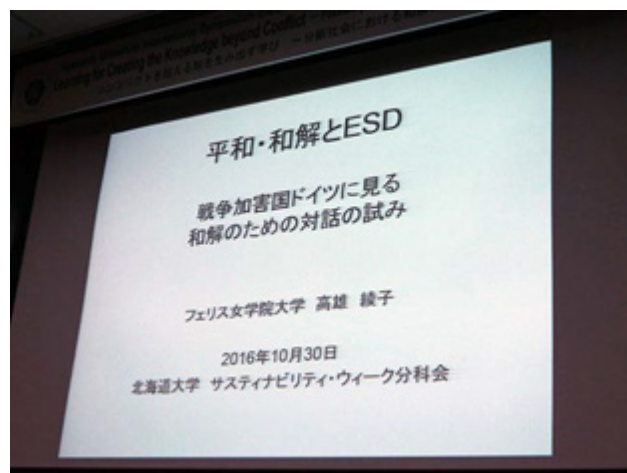
高雄先生（フェリス女学院大学）からは、ドイツとポーランドの市民レベルの和解の模索の実践、佐々木陽子先生（南山大学）からはイスラエルの占領下にあるパレスチナのジェニン自由劇場での表現活動、そして上田假奈代さん（ココルーム代表）からは大阪の釜ヶ崎地区における表現による関わりづくりの活動を紹介して頂き、本学の石岡先生（教育学研究院）からコメントを述べて頂きました。

討議では、マクロなレベルで語られる紛争解決としての「和解」ではなく、個人としての当事者の間での「マイクロな平和」に着目する必要性が確認されました。また、そのためには、第一に、分断社会の下で引き裂かれた状況にある個人の声を発することができ、その声が聴き取られる場を社会的に構築することが必要であること、第二に、それにもかかわらず、そのような場を組み込んだシステムが成立していない状況で、演劇のようなシミュレーションによって感情や関係性を取り戻す可能性に着目する必要があること、さらに第三に、関係を固定化させないで揺らし続ける活動が重要であることが確認されました。

環境正義や地球市民という概念は、コンフリクトを解消するものとして語られることがありますが、この分科会ではそれらを平和をもたらす「青い鳥」として扱うのではなく、むしろコンフリクトのもつリアリティから出発し、その矛盾と不断に対峙しながら問いを深める学びが重要であることが明らかにされました。教育学研究院ならびに子ども発達臨床研究センターでは、このような課題をさらに多くの実践者とともに探求していくつもりです。



討議の様子



高雄綾子准教授による講演時のスライド

セッションの目的および概要

排除型社会は分断と囲い込みをもたらし、人々の間に、そして諸個人の内部にコンフリクトを生じさせる。このコンフリクトを超えて、和解としての平和を構築するためにはどのような学びが必要なのか？

本分科会では、被害・加害の対立を超える対話的实践、紛争地域における演劇活動、そして貧困集積地域でのアート活動を取り上げ、この主題について検討する。このような活動がESDとして持つ意味についても検討したい。

主催

北海道大学教育学研究院

セッションのタイムスケジュール

14:00	開会
14:00 ～ 14:05	趣旨説明
14:05 ～ 14:25	報告 1 「平和・和解とESDー戦争被害国ドイツに見る和解のための対話ー」
14:25 ～ 14:45	報告 2 「占領下で「抵抗する芸術」ーパレスチナ、ジェニン自由劇場の事例から」
14:45 ～ 15:05	報告 3 「釜ヶ崎で表現の場をつくりつづける喫茶店、ココルームで考えたこと」
15:05 ～ 15:15	指定討論 「貧困を生きる者の視点からーフィリピンの事例をもとにー」
15:15 ～ 16:00	討議・まとめ

報告1：平和・和解とESD ―戦争加害国ドイツに見る和解のための対話―



高雄綾子
フェリス女学院大学

要旨

国同士の戦争では、国家の発展、世界平和、自衛などの「大きな物語」により、個人の平和は覆い隠されてきた。それは差別という形をとり、その後の長きにわたるコンフリクトの元凶となる。大きな枠組みでの被害と加害を越え、個人としての和解の対話を始めたポーランドの女性たちの事例から、コンフリクトを越える知とは何かを考える。

略歴

日本大学文理学部独文学科卒業、東京都立大学大学院都市科学研究所修了、東京大学大学院教育学研究科修了、フェリス女学院大学国際交流学部准教授。主要業績「ドイツ・脱原発への市民の学習-リスク認識から地域再生へ-」『地域学習の創造』（共著、東京大学出版会、2015年）

報告2：占領下で「抵抗する芸術」―パレスチナ、ジェニン自由劇場の事例から

佐々木陽子
南山大学

要旨

イスラエルの植民地主義的な軍事占領下に長期間おかれたパレスチナ状況の過酷さは、単に土地に代表される収奪や水や交通など基本的インフラの支配にとどまらない。見えない「精神領域」が同時に侵され、自尊と自治を希求するための自由発想が損なわれていく。現地で行われているさまざまな「芸術を通じた抵抗」のなかでも、現地の子どもと歩んできた地域演劇の事例を、収奪に対する「抵抗」であるとともに、生存と共生への試みであるとして紹介したい。

略歴

香港大学、熊本大学にて国際教育交流に従事後、多文化共生を目的としたコミュニケーション研究と教育に携わり現職（総合政策学部講師・南山大学）。ポストコロニアリズムを共生志向として捉え、暮らしの現場で創られる民衆の知を重視しながら、ワークショップやコミュニケーションのデザインをしています。

報告3: 釜ヶ崎で表現の場をつくりつづける喫茶店、ココルームで考えたこと



上田假奈代

NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

要旨

日本最大の寄せ場・釜ヶ崎で、10数年に渡る表現の場づくりを行ってきたNPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）。商店街で喫茶店のふりをしながら、毎日場を開き、メディアセンターをつくったり、まちかど保健室などを行う。高齢化にともない、地域の施設を会場にかりて、だれもが学び合う「釜ヶ崎芸術大学」を実施。2016年春にはゲストハウス事業をはじめた。

略歴

詩人。1969年奈良県生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめる。92年から詩のワークショップを手がけ、2001年「詩業家宣言」。03年、ココルームをたちあげ「表現と自律と仕事と社会」をテーマとする。著書「釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム」（フィルムアート社）大阪市立大学都市研究プラザ研究員。2014年度 文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞

指定討論: 貧困を生きる者の視点から—フィリピンの事例をもとに—

指定討論者

石岡丈昇

北海道大学大学院教育学研究院 准教授

司会者

宮崎隆志

北海道大学大学院教育学研究院 教授

主催

北海道大学大学院教育学研究院

分科会4：講演2

「文化遺産とSDGs－失われた好機？－」

開催報告

報告者：北海道大学文学研究科 応用倫理研究教育センター 准教授 眞嶋 俊造

本行事は、文化遺産保護の研究や教育における世界的権威であり、サステナビリティの倫理についての研究の第一人者である英ニューカッスル大学のピーター・ストーン教授に"Cultural heritage and the Sustainable Development Goals. A missed opportunity?"というタイトルの講演を行って頂きました。

SDGsの11-4にも掲げられているように、文化遺産・文化財の保護というのは現代社会において喫緊の課題であり、また持続可能な社会を構築するために必要不可欠であることが指摘されました。また、文化遺産・文化財の保護を通じた持続可能な社会の構築に向けた課題と展望についての議論を深めました。

ストーン教授は大学教員になる前にイングリッシュ・ヘリテージ財団に勤務し、ハドリアヌスの壁の管理責任者であった実務経験を踏まえた議論は、教育の重要性を強調するものでした。ストーン教授がこれまで行った、英国国防省より依頼されたイラク戦争における遺跡の損壊・破壊に関する調査、またユネスコにおけるリビア等での武力紛争における遺跡の略奪状況などの調査についての報告は、当事者でしか知ることができないであろう非常に興味深い、また貴重な内容でした。

歴史家であるストーン教授が講演において強調された言葉は以下の通りです。「私たちが歴史を学ぶのは現代を理解するためであり、また未来を創るためである」。文化遺産や文化財を保護しそれらの歴史を学ぶことの重要性を論じることが、人性の涵養という持続可能な社会の構築について考えるという、まさに本シンポジウムの趣旨に合致するものでした。



講演を行うピーター・ストーン教授



会場の様子

講演者

ピーター・ストーン

ユネスコ文化財保護&平和委員会事務局長

要旨

2015年9月25日、国連は「持続可能な開発のための目標」(SDGs)を始動させました。これは2030年までに「貧困に終止符を打ち、地球を守り、すべての人の繁栄を確保する」ための行動目標を「持続可能な開発のための新アジェンダ」として示したものです。

その11番目の目標が「持続可能な都市及び人間居住」です。これには「包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)な都市を実現する」という副題が付いています。11.4では「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」という取り組みを定めています。SDGsの中で「遺産」や「分化」に具体的に言及した箇所は、他にはありません。

「人間、地球、繁栄、平和、パートナーシップ」というコンセプトを中心とするイニシアチブが、1つの目標の下に遺産保護を取り込むのに、都市をターゲットとするのはどこか奇妙にも思えます。何と言っても、世界で自然遺産が見つかる都市というのは皆無に近いのですから！実際のところ、世界の都市人口が増加し続ける一方で、有形の文化遺産のほとんどが、この発展し増え続けるコンクリート街の外に存在しています。エコノミスト以外の人にとっては、「すべての国が持続的で、包摂的で、持続可能な経済成長を享受できる世界」で、この目標を達成できる、と考えるのは、現実の世界の原理に即していないように思えます。

本質的には、これらの目標は人類の長きに渡る存続を実現するのに不可欠な、まさに賞賛すべきアジェンダを定めたものです。これらの目標は、暗に世界を脅かしているものの真因が、概して人類であることを認識しています。では、これらの目標が、人類と地球上の他の生物とを分け隔てる唯一のもの、すなわち「人間の文化」を無視しているように思えるのは、少なくともほとんど注目していないのは、一体なぜなのでしょう？

主催

応用倫理研究教育センター

全体会2：総括ディスカッション

SDGsに貢献する高等教育のあり方

開催報告

報告者：北海道大学国際連携機構 副機構長 川野辺 創（全体会司会）

分科会の代表者による報告ならびに参加者間の議論を通じ、継続的に議論が必要な課題が次のとおり明確となった。

- SDGsの元となる国連の決議「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の第7、8、9パラグラフ（注1）が示す「目指すべき世界像」の実現に対し、高等教育がどのように貢献し得るか論じることが重要である。
- 学生が、変わっていく社会の中で学び、自らも変わっていき、そして社会が変わっていくことに貢献していくことを可能にする教育をどのように制度的に実現できるのか議論が必要である。
- 学ぶ主体である学生の意見をより積極的に取り入れて、学生と教員が協働する形で、授業や授業科目群を発展させていく方法や制度を開発していく必要がある。
- 持続可能な発展に貢献する人材を育成するための教育の実践、評価、見直し、そしてファカルティ・デベロップメントといった一連の取り組みをどのように制度的に実現していくのか議論が必要である。

（注1）外務省仮訳『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』、「宣言」第7、8、9パラグラフより引用。

概要

シンポジウム2日目には、3つの分科会において10の企画が実施される。中には、「持続可能な発展のための教育」や「学生目線」、「和解」といった特定のテーマごとに、教育や学修の実践経験と課題が共有される。

シンポジウム最後のプログラムとなる全体会では、教育の現場そして学びの現場がより生き生きとSDGsに向けて実践するには、大学という組織、高等教育界というセクターがどう変わっていくことが望ましいのか、参加者とともに議論する。

セッションのタイムスケジュール

10月30日（日） 16:15 ～ 17:00 総括ディスカッション

座長



山下正兼
北海道大学副学長

略歴

北海道大学サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム チーム長

北海道大学副学長

理学研究院教授

新渡戸スクール副校長

1

新渡戸学校の概略

- 総長を校長とする全学教育プログラム
- 2015年5月開校
- 対象: 本学の全大学院生(18大学院・51専攻)
- 定員: 基礎プログラム(修士課程) 60名
- 修了要件: 修士号取得、新渡戸スクール科目8単位、ポートフォリオ作成
- 入校者: 64名(2015年度)[78名(2016年度)]

2017年度より

- 基礎プログラム(修士課程) 120名
- 上級プログラム(博士課程) 25名 [2016年度に試行]

NITOHRE SCHOOL

HOKKAIDO

2

日本経済団体連合会による「グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組み」に関するアンケート結果(2015年3月17日)

大学生の採用にあたって産業界が重視する素質、態度、知識、能力

「非常に重視する」＝5ポイント、重視する＝4ポイント、普通で良い＝3ポイント、余り重視しない＝2ポイント、重視しない＝1ポイントで計算

NITOHRE SCHOOL

HOKKAIDO

3

「3+1の力」: 専門性を活かす力

新渡戸スクールでは、現在社会が期待する「専門性を活かす力」を「3+1の力」と定義した

- 能力更新力:** 問題に応じて自己能力を把握し、向上を図る力(自分に対する力)
- 組織形成力:** 多様な専門性を持つ人材を組織・統率し、課題を解決できる力(他者に対する力)
- 社会還元力:** イノベティブな解決によって、社会に創造的価値をもたらす力(社会に対する力)
- 専門職倫理:** 多様な価値観の中で、専門家として公平・公正な判断ができる

NITOHRE SCHOOL

HOKKAIDO

4

新渡戸スクールの特徴(1/5): 国際社会の縮図

様々な知識、技能、経験、価値観を持つメンバーから構成されるチームにおいても、コミュニケーションを十分に取ることで相互理解を深め、課題解決に向けて自身の持つ専門的能力を最大限に生かすことができる人材を育成する

チーム学習を中心としたアクティブラーニング

新渡戸スクールにおいて、多様な専門性、文化、国籍を背景に持った学生が全大学院から参加する教室「国際社会の縮図」を創り出す

北海道大学には、6,000名以上の大学院生が在籍する80の国(地域)から約1,500名の留学生を受け入れている18大学院・51専攻で多種多様な専門分野の教育・研究を実施

NITOHRE SCHOOL

HOKKAIDO

5

新渡戸スクール進行図

基礎プログラム(主要4科目と英語サポート科目)

上級プログラム

参加審査

スタートアップ科目

グローバル課題科目

課題解決型実務科目

国際社会型実務科目

中間評価

修士号取得

プロジェクト実務科目

2クラス/定員60名
5チーム/クラス
6名/チーム

アドバイザー(18名)[学生面談2回]

メンター(各回10名程度)[メンター講演会・交流会2-3回/年]

*プレシメントテスト: 外国語能力試験(TOEIC, TOEFL)・適性能力診断(SEQ: Student Emotional Intelligence Quotient)

NITOHRE SCHOOL

HOKKAIDO

6

スクール生による「3+1の力」の自己評価

能力更新力

組織形成力

社会還元力

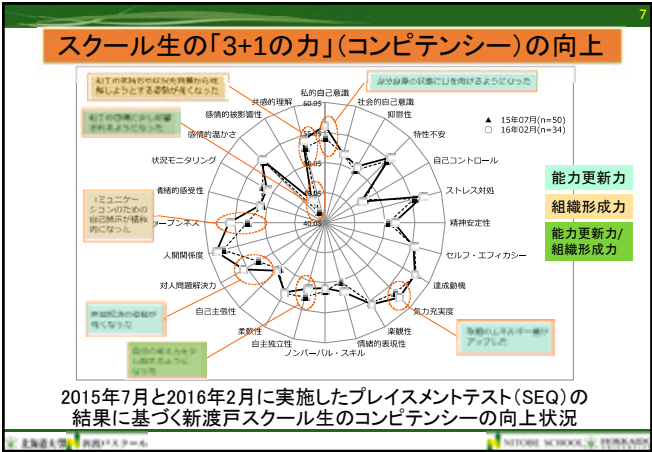
専門職倫理

入学時 1学期 終了時 2学期 終了時 3学期 終了時 4学期 終了時

能力更新力、組織形成力8項目、社会還元力6項目、専門職倫理7項目(計27項目)に対して、受講生が「できない(1)・半分程度できる(4)・できる(7)」の7段階評価で回答

NITOHRE SCHOOL

HOKKAIDO



作成日：平成 29 年 3 月

作成者：北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局

〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目

TEL 011-706-8031／ E メール contact@oia.hokudai.ac.jp

北海道大学国際部国際企画課

〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目

E メール planning@oia.hokudai.ac.jp
